平貞文記

7 3
590

7.3
590
7.3

宗教大学図書

あ〻ひ法ゝり　安永八年己亥正月廿二日　平貞文記

一　言舘草子ゝ三尺八寸ばかりあ〻ひ作りの太刀てそゝる
世あ〻ひ作り乃太刀と云ふ太刀のかゝるはゝ茎とゆう物ゝ
るゝ〻〻ゝ吹丸の太刀一名を鬼作と云ふ茎ゝ長さ尺ゝ
こゝもゝ茎ゝのゝるゝ物ゝ法師ゝ茎ゝ長さ尺ゝ
長さ三寸ゝあ〻ひ法ゝりゝゝ今ゝ茎ゝ長さ尺ゝ

一　国茎ゝよゝゝ七寸ゝ世ゝ
ゝのこゝりゝ世ゝ法ゝ茎ゝ
ゝ世ゝ目法ゝ云ゝゝ七寸ゝ
ゝゝ七寸ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ法ゝ茎ゝ長さ尺ゝ

游戲三昧院
三輪文庫
明治四拾年多田永吉購入

たるをふる

一同菓子のよ極りてむいたりとのこてを楊枝桃李
のたたの落よ入源氏盛裏紙よりてむいたりとをるで
られくりふるをそくりてをあてて汎之楊
梅桃李乃畳を落のの紋よをくるよりあり沢
一同菓子よ極の皮乃かくこびをろ極をくて
あらちをるよふんごたりしを極の皮かとび解て
ぬきをりて蜜かるへ花をくるれかくこびも極をくへ
極をくを延をふをのを如のらちよ極をとをくをへあらち
あくを芸をちをて音れ世へあらちハ鹿屋へらびをも
をびをくをも云同をへあらちをの屋乃をくこびのらち
めををくを芸よのをくをふんをごをくをふををむへ

一同菓子のよ板ををををの板よ
ひををの板をくふるへ板を元寸あるをの板へ緒をを
ををををひ楊を鞭よ鎌をををを法線へををを法線へををを
竹をよ法ををる意をををを
一同菓子のよあをえのををしよりををのををけををををを
みをのをくけしハ茶をををけハ茶のを
らけへ白をくけしを世ををををけをを赤形
のをしを紅梅のをしををよかをーを色をを
一同菓子のよををくををををををををををけをハ
しを分をしををだをくよををををを形を花をしを
鎖茶ひををしの鎖をを九元形をををををを花のを
けををををハ元形乃形をを後の下よりをあよをををへ日た

まつハ敵の刀をとめる之ためなりハ誤にてあるへしとて
とけめから見れハしるゝ之事胴とまてゝ胴と云ハ胴ぞう
見られ袖も着ずしてもある事也之四所に仕て継るを後
胴と云ハ深く候て見て着てそれを包る事包胴と云一枚にする之
しるとあけからたちて見え袖もなきぞうもなきを見へ呼ひ胴服
云ひ名をとる胴服と云ハ胴服と云近世ハ此の補もも胴に袖付
着たる者に候も用る也

一 同草子にこゝにまとる直垂をしかひらしれとそれにまつハ
奥袴にまて綾ハ是也其ハ正義略にするハ直垂づ
見ゝ鶴の形之ま中にある之洲濱乃ちらちらにあまあるを
あるぞるとは云ハ擢文にて其形に絵をかりて縮布よりち
わかれし也と見ゆるに付て絵を出し候之ことに見へる

に鶴の形の絵を出しけるゝ之今世鶴ハ菱をかくべ
たるを云也それハ青きよしとハ直垂にハ云ハ鶴菱する
事ハ菱乃事よハあし次に世菱の事を鶴と云ハ丈鶴文ハ
外見より瀬り染する絵布の様にて事を織るなる物也
外見の鶴の紋と云ハ菱乃鶴と見ゆる事也

一 同草子に白あやのかたけしと云ハ綾にかるよからしぬ
あるまじく厚くするとこそしぬ物なかるよせぬ之言次第
あるをふりてハ糸を色々物之あつくしてすき地ハ綿もむ
しあるゝ見えけてくみれるかり此之絵の為の染に
あるぞと云かるゝ此由まを為し候して出てある之なる候
見るに中に染る絵しれ其子にあるし候若し候して出る之
何の草子にと云書にのまして故き物之さゝしかくるの様に

実源よりあつし唯伝人の再目をとりこもんうの作り
ことをかきうわしこまかしふりの手ぶりよりと地獄うら
もあり又舞のかたちもしたるぶりうまさまの舞の者よ
もあるこうあるいはしかし舞ひしてぬしの元がしむ
こうもこうして舞をまひして世をうとうとうまうり
舞ひしてよりある奇ふ舞手数長歌の職人を数名
ものの哭人の形を絵出うもあれ手合よりあるもの絵
にはこの絵が出作光信画しへ者よりあれ時代を遠
又作り名あるもあるを作りるものを正しうぶるわれ
ものもふうきものあるゆへ者きこばんうるなをけもある
をあるおりされが新井筋ねる源君義事器考よし
たりうしうの者よ田村者ますあ御者子あもをけし

うう者ゆ顔も取合うもを捨さうを論語の京
讃も清りちうあるうるうるうるうるうる人ものを者よあうう
なりとはうるれしはあ月よりたれ伝ものうるしたりてし
あふうりあもふ山ものれしたれ知人の居しあるうあ
形をう絵書稿ふ名ふうきしいるうんうる益ふう学人
名るこうへよりしのあるもしもあるて神伝むを月
半をバ伝のもちふはは人かりも和書ろうをあふて
ものうふいう人思ねうしもうる世ろう源の郎ものを長芳は
ていりが郎のものよりうは国ざうかをしたれるもうは者
あるていりあるうるうや
一人のものへ送ろ事はを八書絵ねはもちめうう絵はも
源て又云ものりれ人ものや又宮出ちが人ものるすやもうべて尺

無キ事人金子をもらうことを賀して帰り故志乃勝よ
今ハ夜店生涯何れもあらし書よう大名子を失し
事ちがへより五ヶ所の時のごとくにれいまして敷地の文字
人帰り初めを得ることを正札にて銭永千貫して書と
是を済と云済て末遠き之人々帰り初めて御ほろ
改めて云ハ先札より又やかし此百免へさして之心を進
一 新安手簡 新井筑後守殿著ス 水戸ノ儒臣安積 日本陸奥州五十四
郡の内を手取中に與ふは此先紀角知兼は仙台庶民で在
の事始なれは仝右事して在志れ候は平之覚白皇家全盛し
時に一郡をも立札しも必不順ゆるの前を支し文往を上旨では中諸案た
是は然ハみえず其所の記載より此れ候ふは讃合見乃代続
奥国は武家代ことかはらる事は分生まるも出羽やなる

らましゆとめて引用よも定の極の事、本年陸郡とかうとも
見るは人の旨しては御用集より延遅足人も取りにおるも立て
付るまでる事ちらかしてかれは○又日本よりも下も在候ら
ましく奥州五十四郡に中ゆり大射し下本の延喜式にも合
へは所裁宇多郡にあらしは源順倭名抄、笑し八所置郡に
大治ほ一郡あらし在を中本の式ニ六郡にやの在るへ今各
藩此写本の式有まじは如何にかや年兼然裁事と沢江桜本
抄は六十六郡と是倭名抄にて実国あらし御用集に之きて
いかにも五十四郡に是の御用乃ず還御事の作にいかるめは
へとも陸奥は一しはや乃ず文沢出時
公儀の御帳より年二郡を裁く目下の其門白河白川宇多
宇多乃四郡にあいうましも一郡よりを限至る如もあり文字

或ハ讃岐るもかつてまし所へ此人ハ実ハ奥郡にて人の家
平泉の藤原清衡の孫の下に出羽みちの国を有ハ奥六郡
を一国となしを十二郡をさきとちて出羽の国をハ奥郡と
なしの様にハ西信賀者の門に八佐藤ハ宇四郎の流にて有
ハ実にて此へハ藤原秀衡の流れ引続き平泉の清衡用集も家
やうなしけれは證もなし抑宇四郎とかするを考し
並ゝるハ宗清は次信経を兼なり此事を先師より及承りき
附東鑑の講をせし人の奥六郡を一任せしるを御館を奥
六郡の主といひしも此也昔ハ六ヶ十二郡なりしを後に九
五十四郡にわかちて押領せしをなといひしハ大佐に八ヶ
ハせけるもあるしけるなしハ其講師の名も承りへ
ぐしき事ハテいろいろ乗しハ兵衣迄され共遠事也

いてたる沿革ハ及ぬかりけれとも建武の年代乳角に
出れは尊氏三条ハ其等を悉示に頂かれは可為大章に筆覚
口貞丈云右に示消先師にハ新井氏の師木下順庵之五積
返答にハ此在に引平泉の御沢の陸奥守四郎たりしと云人あり
平家の沙汰伝堆前行長の作に有りはに須鳥羽院の御代の
人なり七億の集と云ひとられて五億の冠者とよばれし人也
後を陸奥国宇四郎と云すハ後鳥羽院の御代にてはよはれし也

一 除目に箋と云ものを大鏡にも書り或は云は前に小折紙と（除目の事に）
任をも付てまり置之夫をちいさく結れは宗と箋と云ものを
こつけ紙のやうなるもの也是を挑て筆をとりて宗とするもあり
て一人ゝゝの名道を職事書ハ内元の役人が鑰で書き入れ乃
庭に立て平かをかす之箋と云ものハ紙を一尺許りに四角にて

[illegible]

○除月書[illegible]又義[illegible]也仍是之猶可正

一焼鰹　新猿楽記云七御詩者食飲愛酒也所好何物鶏目之飯蕎麦眼粥鰭粉切鰹酢煎鯛中骨鰹尾焼[illegible]

仍之鰹を八焼て食さるなり[illegible]

丁数を鰹を尾焼[illegible]

一男舎人詞云はごきやあるしこれをたるこそ詞の

物ゝたる之又はしるものをやこれをこそ詞の

物じたる之又はしこれをこそ[illegible]

切[illegible]

云詞の物たる之いたりけしこれをこそ[illegible]

たる之又[illegible]

詞物していやしくけつのもちゐ

一剃髪　古事記垂仁天皇記曰爾其后有豫知其情悉剃其髪以其髪覆其頭亦腐玉緒三重纏于且以酒腐御衣坐全衣服此設備而抱其子刺出城外其力士等取其御子即握其祖爾握其御髪者御髪自落握其手者玉緒且絶握其御衣者御衣便破○負文安髪ヲ剃テ尼ニナルヿ八佛法渡リシ以来ノ事也此垂仁ノ后ノ時未佛法渡サル時事ナレハ尼ニナリ玉ヒシ非カ力士カ髪ヲ取テ城外ヘ引出シ奉ニテ恐テ髪ヲ剃テ其髪ニテ頭ヲ覆ヒ玉ヒシ此時既髪ヲ剃テ有

一堅奥木　古事記雄略天皇記曰初大伯皇子日下之時日日下之直越道幸行爾登山上望国内者有工堅奥作答屋之家天白玉令問其家之内其工堅奥作答者誰家答曰皇孫之大縣主

家爾天皇詔有奴乎己家似天皇之御舍而造即遣人
令焼其家之時其大縣主懼畏稽首白奴有者隨奴不
覺而過作其畏故献能美之御幣物能美字ハ音布勢乃白大著鈴
亟族名謂膳佩人令取大縄以献上故令止其著火。
夏又昼堅奥ハカツヲ木之茅葺ノ屋ノ上ノ棟ニ木ヲ×此作
テ置ノ風木ト云風ノチトヲ東風ノフクナトニ云ハルヲハヤナリ屋ノ風ニ吹ヲフセカヌヤウニスルナリ
此風木ノ動カヌ為ニ木ヲ横ニアラン風木ヲ助ケ堅ムル木ヲカツヲ
木ト云之カツヲ木ト云ハカメムル木ト云ノ二語ノ約シ云トナ
ルヘシトウ音相通スル故カツラ木ト云ツラノ音相通ル故轉シテ
カツヲ木ト云堅奥大殿木ナト書リハ詞ニ付テアテ字ニ書ル
也風木ヲ千木ト書ニ同シカツヲ木ハ堅木ト書ヘシ奥ノ字ヲ加
ルニ及ヘル也古事記ニ堅奥トハカリアリ木ノ字ヲ書ス也上

古ニハ堅奥トハカリアシナルヘシト上古ニ貴賤ノ家皆茅葺也故ニ
風木アリ古事記ニ據レハカツヲ木ハ天子ノ御殿ナラテハ上ヲ法
ト見エタリ後代茅葺ナラス神社ニテ千木鰹木ヲ置ハ誤リ
ナリ千木鰹木上古ニハ神社限ニサル事也千木ハ風木ナリ
ト云ハ桂秋斎カ發明ノカツヲ木ハカメムル木也ト云ノ説
カ考也

一 伊勢内宮外宮　古事記上巻三次登田宇氏神此者ハ坐
外宮之度相神者也ト見エタリ古事記ニ四十二代元明天皇
ノ和銅五年ニ太朝臣安萬侶カ撰ス書也是元明天皇御
代ニ既ニ外宮ノ名アリ外宮ノ名アレハ内宮ノ名ハ元明天皇ヨリ
モ猶先代ニ始リシナルヘシ和事始ニ内宮外宮ト称セラルルハ村上
天皇御ノ時ニ太神ハ奥座ラルル内宮

し号し度金宮ハ外座ヲ紙上ニ書ケ
名秘書ヨリ尺ヲ〇貞丈云古事記ノ文ヲ以考ヘ合ル所也
秘書ノ説誤リ多シ

一 禾乃古器量　秀吉朝鮮ヲ攻テ後ニ大明ヲ攻取ント欲シ給ハ
器量大ナル人也ト云テ秋美ナル人多シ〇貞丈ニ是器量大ナル
ニハ非ス器ハ小シトテ欲心深ク大ナル人也器量ト云ハ智也秀
吉ハ無学文盲ナル人ニテ惡ナル形智有善ナシ唯凶狼
ノ如ク武威ヲ張テ人ヲ怖畏セシメテ国ヲ治ントス假令朝
鮮ヲ抜キ取リ其何徳有テ其後ヲ能治ン況ヤ大明ヲヤ治
術ヲ知ラズシテ大国ヲ得ル事ヲ願ヒ欲ヲ是欲心無限廣大
ニシテ器量ノ甚小キ人也

一 亀ト　三代實録巻三十清和天皇貞観十三年夏四月
廿四日癸亥宮主從五位下兼行丹波權掾伊伎宿禰是雄平
是雄有壹岐嶋人也本姓ト部改爲伊伎始祖忌見足尼命
始自神代供亀卜事ヲ歌後子孫傳習祖業備於ト部
是雄ト數之道尤究其要日者之中可謂獨歩ト〇
貞丈按右之文始自神代亀卜事トアル亀ノ字ハ誤ナル神
代ニ亀ト云ハ無之古事記日本紀ニ見ヘタル神代ニハ天香山之真
鹿鹿之肩ヲ全抜ニシテ天香山ノ天波々迦ヲ取テト云是
ヲ太ロトニ云古事記ニ見エタリ亀ト云ハ欽明天皇御代以来
ノ事也欽明天皇二十四年百濟国ヘ使ヲ遣サレシ時詔シテ
ト書暦本種々ノ薬物可付送ト求ノ給シテ日本記ニ
見ヘタリ然レハ亀ト云ハ以来ノ事之神代ニハ無之
一 農民任右ス処ヲムラトト云村字又物乎均ナラサルヲムラトト云

一 群ノ字 ム手物ノ一集ルヲムレトムレト云ハムラノ略語也何レモムラト云ハムラカルナリ

群ノ字之 ムラガルハ物ノ多ク集ルヲ云之深物ニ村濃ト云モ白地ニ何色ニテモ一処ニ濃ク染テ又遠ク間ヲ置テ濃ク染ル幾処モ同シ如ク染ル也是モ其色ノムラカリテ一処ニアツマリタル意之村雨村雨ナトモ一処ニアツマル意之村雨モ間ヲ置テ一度ニ降来ルナリ村千鳥モ千鳥ノ集リ飛スヲ云皆群ノ意之推テ知ルヘシ又ムラノ村コキト云モ一面不残削ラズシテ間ヲ置テ処々ヲ削リ其削目一処々々ニ集リムラカル足入ノ手ハ乱氣ナルヲ付氣ト云モ本氣ト乱氣ト間ヲ置テ氣ノ集ルヲ云也

一 をちこちの泊りまけしらなおくしこ云同ありけいる舞ひ發其かどの字を用ひてなあやしくいへることなれまを以之

雨夜物語民詞 藤原亨麻佐乃説

一 たえ/\にてなきことこゝろは後のよにつれて悩ましきことをあはれみ悩ましき也 同上

一 おほどきは大人めきたる也おちつきたるといふ 同上

一 ときはとは長々しくいふことなりとかいふ 同上

一 くるしきことくるしいとは傷痛也怪れどもものいひにくる 同上

一 わこかましとかましは辞なりしとこは意也つまむこころしなれは意ちかる事はなれはなもひやまふることやまるは息もたはれなめけなることなもいはる花の弁なりなおこしてされるはやとを用ねしおろかなる意也 同上

一 尾篭の二字ををこトヨム 字音ニテモヲウトミヘハヲヤニテナリ尾ハヲノロナリ

一 似字儒書ニアシレリト訓ナラハセリ菅公ノ循麿日記ニ

いもけるさうんなとはりのともんるる文字によりてさえへと
つゝしもごでこれゝへきことのあられども彫虫ろうよな似たり
らんとよりうきとそのうたへは似さんにの道も拙にし
あるに之ラたゞの里をへでもれけにてうろほどのともしるを
有さ詞よとはなりいうるもある

一小忌しるに服の名を行ひし服の名青摺の衣之當年名を
との神事にて小忌大忌してりの代の先名あり大忌と名の海
戒之小忌今ひしこと無戒之小忌の斎戒にあつる者人のなかなか小忌
の衣とは小忌と云之大忌の人は名と名を服なり首尖
忌小忌の人ト云ことも名けられとて大忌小忌のことなり大
嘗會使等の記事ありへし

一欲言廣儒書ノ云ホッスルトヨム本語ノ法ホル氏ホッスル氏ト萬葉

ヨリ見ルヘカリムサホルト云モムサソリホル也ホシキト云モホリシキ也

一道路里數ノ事勘者御伽雙紙ニ云塵劫記ニ云曲尺六尺
五寸ヲ一間トシ六十間ヲ一町トシ三十六町ヲ一里トス或人云伊勢
道四十八町ヲ一里トストテ云ハ偽也馬子駕籠舁ノ類ノ爲ニスル事
アル故カヽリトテ云ナス也東海道ノ里程ハ曲尺六尺ヲ一間トシ六十間ヲ
一町トシ三十六町ヲ一里トス伊勢道ハ只八尺五寸ヲ一間トスルノミニタカ
ヒテ餘數ハ東海道ニ替ルコトナシトテ云ヘリ然レハ伊勢道ノ一里ハ
六尺間ノ三十九町ニアタル也一里コトニ三町多シ伊勢道ノ十三里
ハ東海道ノ十三里ニ當ル也イカナル故ニテ四十八町ヲ一里トスルトナレハ
ト考ルニ山田ノ外宮宇治内宮ノ間四十八町アリ是ヲ外ノ人一里
ト称スルヨリ起ルナルヘシトテ云ヘリ又或儒ノ云四國ハ皆四十八町
一里トスト云ヘリ又延喜式東西両京ノ丈尺ヲ記スルニモトツキテ

カヅクル片ハ一町ハ四十丈ノ者ニ是ヲ六十間トスレハ一間ハ六尺六寸
六分有奇也間ノ尺寸和漢氏ニテイブカシ右市伽羅紙等術士中根
安之惡法舶カ所著也

一白雉ノ年号ヲシテキヽス朱鳥ノ年号ヲアカミドリト日本紀ニ
訓ヲ付クルハ後人ノ所爲ナレハ是ヨリ先ノ大化ノ年号ニ訓
ヲ付ズ訓ノ付ニシタヽ改ナレハ異朝ノ学ヲ年号ヲ建ラレ上ハ
年号字音ヲ用ヘシ国訓ヲ用ヘカラス歌書類其外カナ書
クル古書ニ年号ハ皆字音ヲ用ヒタリ近世ノ哥ヨミ誹諧師ナ
ドヽ者年号ヲ訓ニ書クハ故実ヲ知ラヌ大化ノ如キヲオホバケト
ヲシハ聞ニウシ

一齊明天皇日本紀曰元年秋七月己巳朔己卯於難波朝饗托九新羅
使九十九人東漢ハ蘇我蝦夷蝦夷九十五人并設百済調使一百五十人仍
授冊命蝦夷九人津刈蝦夷六人冠位二階云是ハ蝦夷国
人乱ヲ起シタル片ヲ扶クル者又自テ帰化シタル者ヒヲ処々ニ
配リ置シタル蝦夷等也蝦夷ノミニ非ス三韓人モ処々ニ配
リ置テ召ヒ仕ハシム事アリ日本紀ニ見エタリ

一暦術ヲ不用シテ新暦ヲ作ル異方ノ事知暦之大概也
中根安之亟法舶カ著ハ処ノ勘者御伽雙紙曰九年以前ノ
クトハ支ノ年ノ暦ハ分年ヲ用ル類ナリ古暦ヲ取出シ其二月ノ大小ヲ干支カ即チ当
年ノ正月朔日ノ干支也サテ古二月ノ大小ヲ新正月ノ大小トシ
古三月ノ大小ヲ新二月ノ大小ト次第ニアル也又術ニ古暦正
月朔日ノ干支ヲ見テ其月大ナレハ干ハ五ツノ支ハ九ツホナレ干
ハ四ツノ支ハ八ツノ新正月ノ朔日ノ干支トスル也クトハ古暦正月
甲子ニテ大ナレハ戊甲小ナレハ丁未ト心ヘシシサテ干四気分クトハ
古暦立春甲午ナレハ干ハ二ツノ支ハ七ツノ丙子ヲ当年ノ立春

ト知ベシ但シ其氣朔ノ入ル時刻ハ古暦ヨリ六七刻先立ツベシ古暦
朔ニ刻以前ニ入ルナラバ二日前ヲ取ベシ如此シテ月ノ内ニ中
氣ナキヲ閏月ト定ル也又別ニ閏月ヲ推ス術アリ前年ノ冬ニ
至ル日類ヲ以定法二十九日ノ内ヲ減シテ餘リタラバ八四日アラバ
四月ニ閏アリト知ル也九前年ノ冬ニ至ル日以後ナラバ求
年閏ナシ○自文武延享ノ年中ヲカ同僚蜂屋小十郎
源定章天文等類ニ通ス輟耕録ニ九年以前ノ古暦ヲ以新暦ヲ
作ル方アリ其事ヲ俗解シタリトテ一冊ノ書ヲ見セタリキ
讀クレ氏今ヲ忘レタリ今思ヘバ中根カ記セシ趣ヲ猶委ク記
セシナラムモテ写サヾリシテ悔シキ事也

一多年類月数日数ヲ速ニ求ル事右同書ニ曰神武天皇辛酉
ノ年正月朔日庚辰御位ニ即キ給フ夫ヨリ享保十六年辛亥
ノ正月朔日乙丑ニテ年月日ノ数ヲ問フ答云年数二千三百九十
月数二万九千五百六十一日数八十七万二千九百六十八閏月八
百八十○法曰前ノ辛酉ヨリ後ノ辛酉ニテカヾヘテ十ヲ得ルヲハ十八
捨テ余リ一ヲ左ニ置キ又前ノ酉ヨリ後ノ亥ニテカヾヘテ三ツヲ
得ルヲ右ニ置右ノ数ニ十二ツヽ宣子加ルヿ其ハシメ左ト同数ニ
ナルヿテ加ヘテ今四度加ルヿ五十一トナルヿ神武天皇ヨリ大化二年三四
百十ルヿヲ前方覚悟シテ先六十一周ツヽ此九メクリ二十三
百四十ヲ加テ二十三百九十一年トシル又月数ヲ考ルハ右年数
ノ月一ヲ減シテ定法二百四五ヲカケ五十六万十六百五十トト
ルヲ十九ニワレハ二万九十五百六十不盡ハ余リヲ得ル二月加ヘテ月数ヲ
知ル但シ三百四五トナル九トハ二年十九年ノ月数ヲ知ル八月数ノ内一ヲ減シテ
定法二十九日五三〇二八ヲカケテ八十七万二千九百二十五日不盡半日以上ハ一日ニ収ル

ヲ得ル二日ヲ加ヘテ日数ヲ知ル也○サテ合否ヲ試ル二往古ノ正月朔日庚辰ヨリ後ノ正月乙丑三ノ数ヲ前術ニ随テ四十六ヲ得ルサテ右ノ八十七万二千九百二十六ノ置六十二満ルハクニテ不尽四十二ヲ得ル右ト同数ナル故合ヒ等ト知ル也若シ不等ナレヲ相減シテ餘リ前ヨリ後ヲ減ス一カ二カヲ得ル者ハ是ノ得ル者ハ是ヲ以日数ヲ加減シテ合ル日数トスヲ又九及其前後数ヲ得ル者ハ月数ニ。一月ヲ増損シテ増損ヲ定ル可ニ前ノ如クシテ前年三月ノ月数ヲ求ル其月数ト求ル年ノ月数ト相減シ余リ十三ヲ得ル者ハ一月ヲ増シテ十三ヲ得ル者ハ二月ヲ損ズルナリ合ル月数トヲ是ヲ以日数ヲ求ル了前ニ同ジ又閏月ノ数ヲ知ル事数ノ因一ヲ去リ余リ二七ヲカケテ十九ニワリテ不尽ハ捨テ閏月ノ数ヲ知ル也但シ前ニ増損アル者其増損シタカラ爲ニ示ス懸神列。○皇天宗赤字神字褒美ノ辞也吾国ヲ

神国トスモ褒美ノ辞ナラハ是ニ神道アル故トスハ非ナリ又天神ノ神孫皇位ヲ兼継ヲ他姓ノ者奪ザル故トスモ未可也神国神道トスル称ハ中古以来ニ出シ云ル故上古ノ国史ニ武等ノ書ニ見ヘス○神道ノ二字出知下ニ記ス

一要害　同書二十集ヲ引テ云要害ヲ我爲要害ヲ敵爲害

一敗北　同書二十集ヲ引テ云来勝逐北ノ北ノ音佩敗也云云○貞丈云梅小補韻會ニモ蒲昧切ト有リ然ハ敗北トツヾキメテノ其音ハイハイトヨムヘシハイホクトヨムハ誤リ之キタトヨムニハ音ホクノ上ニ菊忘勒切ト音オノ俗説ニ云武士ハ武器ノ頭ヲ北方ヘ向テ置カスル北ニ向テ弓射スル北ノ字ニクルトヨ故忌ケトスル北ノ字ニクルノ訓ナシヤブルヽトスル訓ヲ忌ムナリ中世以来武家ノ習俗也

一年忌下三毛東鑑安貞二年戊子十二月廿五日故右大臣家寶朝
十三年御追善也

一詩哥　貞丈曰唐の詩も我国の歌も真俗を仮化アリ
真俗とは上古の詩歌と後世の師匠なし教
よりあれば学ぶべし喜怒哀楽の発れたる
事を忘れ思ひ安ひ法を違へずして流れ動を
いひ欲より人となりて風を変へ俗を化ずして
その流れ情を述べその心を変ずもしるもそのうつる
至誠の情より出る辞なれども求めずして人なつき感ずる
なり三辞の内なりとも真と時代遷
り詩を作り迷るく巧を用ゐるとしなつらを対
代の法礼盛衰を忘れて自然の辞ばかりなる故

よ後代なりても三代の歌風人情ばかりなるべきもれ
人となりて感動しむる事なり仮化の詩
歌の詩歌の詩歌は師匠なし教へ学ぶ歌
三ツの内なる筆の人なり歌は人情を
然なくして感ぜず詠じ楽なくして楽ぜず詠じこの原三
よ所にして遠き代の風を詠じ光を仮なる詞ハ当
世の近き詞を作り古の詞を引き改めて辞を
仮る事をまなぶべし虚辞を述べ虚辞を人全脱もしめ
人ふるあり人なるべきを必ず仮を少べきやふ
心を引き巧をいとなべき虚偽を巧なしてこの虚辞を
師匠の詩なるべきを虚偽のうちあそびるのふ
実目なる出家の法礼盛衰を忘れかたらるる人を

もとこれ文学華の科条なれば偽を巧にする人をさして
詩人歌人と云天子より庶人にいたるまで詩歌小偽を巧
にするを法令にしるす故やいふらしを建
詩歌の作の無ふかを知するものなれば刑罰をも
知るべきことなるべし

一 おもふ道の事 皇文を我国の歌と云ふ道の事なり
上古より皇代の初之を詠ぜ給ふ日本の一国のみ
ならず天下を治ぜ給ふ天下を治ぜ給ふ人
の敬ふ道 應神天皇の御代始て歌人の作ありこれ
より皇代々の天皇御代々の人の作ありこれ
ひて勅撰して天下を治ぜ給ふ法を律令格式等
を定め給ひしところ言語の作は人の神武天皇

一 東征と宣ふ代々の天皇天下を治ぜ給ふ心ばせ
忘れ給ふ事なし歌をもふうりして歌をもふうりしこと治
ふべきなり歌を忘れ給ふ事なし歌人の和歌

一 棟札 贈録雑録曰上梁文自唐李賀作建宮殿上
梁之時頌美作室之意而書紙以置梁東西南北最
燈新話及文天祥集国朝建神廟仏堂書檀越之主
名暨功德於札而釘棟梁 相州建長寺新梁銘宋
隆蘭渓平時頼 明月記 最明寺書

一 婚礼六俗に返す出ずと云詞の忌ぶ婦人の夫に別して返る事
婚家より出すれば丁寧深く恥ずるが故に其詞の忌ぶ
婦人の誠こころの意人然るに夫婦酒盃を交るに返盃を進
俗間の習也昔は返盃をせずして盃を交る礼あり又婚礼の

賀ハ狀ノ文ニ目出度ト書テ出ノ字ヲ忌ムヿヲ忌ル別ニ文
言アルベシ唐ニテ婦ノ嫁家ニ入ルヲ歸ルトヽカヘルノ訓義
ニ非ズ字彙ニ入ル也トアリ オニヰキ入ルノ義ナリ

一 音ノ畧ト云ハ 平聲上聲去聲入聲也 平上去ノ三聲
ハ音ヲ引延ヘテ唱ルニ其音ノ上ノ下ノ差別也メルヘハ カ
キノケコノ五ツニテイワヽカキクケコト音ヲ引延ヘテ
唱ルニカアノアヲ長ク引テ唱ルハ平聲之アノ長ク引ノミテ
強ク張テ唱ルハ上聲之アノ弱ク弛テ唱ルハ去聲之右ノ如ク
唱ヘハ平聲ハ上リ下リナリ平ニ云ヘヤカニ聞ユ上聲ハ上リ聲
上リテ強ク聞ユ去聲ハ上リ聲下リテ弱ク聞ユ去ノ字ハ聲
ノ末ノ消ユ云ル心之入聲ハカキクケコトシ聲ニツノ音
ヲ含ミ云ルカ如クセハシク逼リテ聞ユ之入ノ字ハ屈ノ入テ伸ザル

意之入聲ノ字ハシリ聲ニフツクノナキノ五音ヲ含テシリ
聲ツヽル之唐音ニテハ弥平上去入明ニカヘル之和語ニモ四
聲アルカ故ニ古事記ニ本文ノ間ニ去上等ノ字ヲ付タリ和
語ニテモ常ノ言語ニ上聲去聲モアリ平聲入聲モアリ今
世ノ俗語ニ平聲ハタヽノ田舍詞ニアリ歌ヲ謠フニ至テハ畧聲明
ニカヘル之和語ノ畧聲ハ五畿内ノ人ノ詞ニ月ヲツキト云平聲
ヘキノ音下リテ弱シ關東ノ人ノ詞ニハ上聲之キノ音上リテ
強シ畿内ノ人ノ老ヲハナト云ハ去聲之ナノ音下リテ弱シ
関東ノ人ノ詞ニハ上聲也ナノ音上リテ強シ畿内ノ人ノ鼻
ヲハナト云ハ上聲之ナノ音上リテ強シ関東詞ニハ去聲
ナリナノ音下リ弱シ雅語ニサリトモ俗語ニサウシヤト
云是サトヽヲ引延テ サウト云ハ平聲ナリ田舍人ノ

詞ニサウメアヨトヽ云サウメアハ手聲也田舍詞ニツキエムトヽ云テヲ
ヲヽツヽコムトヽ云ヒヽハナツトヽ云テヲ。オツハナスナトヽ云。オツ
モ。ウツモ 聲也 餘ハ准シ知ルヘシ又云畿内ノ人ノ詞ト
関東ノ人ノ詞ハ上去ノ二聲相表裏スル也

一 丹波氏 国史姓氏録ニ見エタリ。タチヒト訓也此ヒ
ノ字イト唱ヘシ天長九年夏四月丁亥木工頭従五位上
多治比真人貞成等奏請改多治比三字為丹墀
両字ト。三代実録ニ見エタリ丹墀ハ。タチノ音ヲ延
テタメナイヒタナビヒタナヒシト訓ハ訛也 丹墀ニヨル。ニヒヨハ誤リ スアカニヒヨル尚誤リ

一 天神地神ト云ヒ差別ヲハ舊事紀ヨリ云出シタル事也舊事
紀ハ偽書也用ヘカラス日本紀古事紀ニハ其差別ナシ後代
舊事紀ニ據テ天神七代地神五代ト云ヒ日本紀ニ神世七代

高天原記ニ同シト云事ハアシ尾天神七代トハナシ巨勢彦仙カ本朝歴史略
評註ニ天神七代地祇五代ト書スルハ誤也舊事紀ニ所謂
ノ天神地神ト天神地祇ト同義ニ非ス天神地祇ト云ハ
天神ハ種姓ノ貴キ神ヲ地祇ハ種姓ノ賤キ神ヲ云フ後
代堂上地下ト云カ如シ西土ニテ所謂ノ天神地祇ト同義
トスヘカラス吾國ト西土ト事物名ハ同シテ實ハ異ナル者
アリ猥リニ混一スヘカラス

一 タニギル タニシイキ五ノ畧語ヒタヒ魂也キル消也強ク驚
ヲ云ヒ田舍詞ニタニケルトヽ云ハ上ノ約ヒタ也キテ加高ク古歌ニ
雪消ノ上キクト云消エスカ上ニトヽ云フ。タスカ上ニトヨル類
ヘ江戸詞ニキモノツブスト云ハ鄙俚ヒ田舍詞ニタニケルト云
古雅ヒ古風ナルハ田舍ニ多ク残リテアリ江戸ハ漸ク移リ改ル

一 音聲ニ律呂トニ六律ハ輕ク清ケ九聲ノ調子也呂ハ重ク濁リ降ル聲ノ調子也調子ト聲ノ色ノ男ノ聲ハ呂也女ノ聲ハ律也男ノ呂ノ聲ノ中ニ又律呂アリ女ノ聲ノ中ニ又律呂アリ凡人聲ノミナラズ万ノ鳴物皆律呂アリ律ニテ呂ヲ合ニ呂ニテ律ヲ合ムアリ故ニ六律六呂アリ

一 往年安永七年戊戌四月比世間有流言曰若狹国民入山者偶見異僧僧謂曰今年六七月將疫癘流行天下民人多死乎若欲避之則須轉歳月所謂轉者須以五月晦爲除夜以六月朔爲元旦行賀儀矣諸国傳聞之多有隨其説者江戸府下亦士庶多用其説者五月晦行儺如除夜六月朔行賀如元旦坊間市店休商閉戸戴笠亦如元旦也可謂一怪事矣凡市店每元旦休商閉戸戴笠或有喪事休商者亦然今年歳己亥二月二十有四日吾將軍之儲君急病薨矣天下舉哀亦府下坊間市店休商閉戸戴笠如去歳六月朔矣今思去歳事蓋此妖乎

一 厩神 武士厩ノ神ヲ祭リ名ケテ諸社根元記曰生馬神天德三年三月九日正二位 坐左馬寮○扶桑畧記曰昌泰四年七月廿辛亥左馬寮乾角御坐従五位下生馬神被加階日本記畧亦同之諸社根元記曰保馬神延喜三年三月廿五日従五位下 坐右馬寮○右山城名勝志引ヒテ生馬神保馬神ヲ厩ノ神トスル人日本記ニ保食神ノ頂ヨリ牛馬化生スルヨシ人ヲ生馬神保馬ノ神氏ニ保食神ノ別号ヲ云ヒ保食神稲麦豆等モモトヨリ日本記ニ人ヲ食ヒ社ヲ生ト云ヒ小伝ヲ保食神称ヲ生馬ト生ニ云ヒ小保生馬神ト保食

神とも称するなるべし　保馬ノ保ノ字ハ生ノ字ニ對スル
ニヘヤストヨハシ保スルナリ

一蠻繪　古書に褐衣ナトノ文或ハ調度ノ文ナトニ蠻繪ト云フ
見エタリ　禁秘抄　清涼殿篇ニ云蠻繪ノ御厨ハ十二ツ云々壺井義
知カ傍注蠻當作盤ニ九キ文ニシテ其文不定ナリ　眞
文云中古以來乃書ハ字義ニ拘フダニテ音訓ダリ用ト
ハ彼ト足ニ倚リ〳〵あて字ニ用ル例年一行器
ヲ外若シ云類ハ〳〵ヲ麗ヲ孔ヲ出ル〳〵ハ多リ蠻繪
モ本ハ盤ナリ　蠻ハ字をあ〳〵字ニ倚用ひ〳〵ル
盤ハ字小補韻會ニ蒲沿切ニ蜀江三峽中水波圓折者
名ヲ曰盤トヨリ然レハ盤ヲ以ハ凡〳〵めぐる文文たよい
ヒ盤ヲ云ヒ七其形圓ニシテ依之まろ〳〵文ノ盤繪ヲ云
たとへハ鴛鴦九鳳凰九獅子ノ九龍ノ九ろとの類ヒ云フ

又活物ノミニ限ラズ梅ノ九菊ノ九草木花葉ノモ盤繪ノ用
ヒ事ノ多シ〳〵

一唐草　かゝ草ヲて地ノ文小画〳〵ハ草の蔓のかゝるたる
姿ヲ云ふ〳〵草ヲて云ふ〳〵ハ蔓草ヲ云ふ〳〵ハ
しり〳〵字ハ蔓草の二字ヲ用ひ〳〵ふ字ヲ用ひ〳〵ケ
て唐の字とあて字ニ用ひ弘れるなり此類多シ

一金堀集ハ鎌倉右大臣實朝公の歌集之三冊ヲ金堀集ニ云
建暦元年七月洪水漫天土民愁歎ス〳〵ヒ〳〵て二人奉
向本尊致祈念ノ
時ヨリすぐれて民のかなしさ〳〵し大地王西方ハ久
敷入ル　右脩ヒ〳〵ノ〳〵ひ〳〵ル東海ニ〳〵ル入ル記ヒ漏ス
なり〳〵　又獅子ハ地ハ序文追物者鎌倉右大臣ノ歌

権輿之ゝを足し東漸ふ人ゝ此を写ゝ伝へ東漸ふ
記し漏さるゝ多くべし又近世の頃より東漸ふ人ゝさる変
伝記しゝ出るゝ迄世人の偽化妄説まして
所なき流布されを一向ふ日蓮宗国論ヲ献セシヨリ外ノ人東漸ふ人ゝ
へツイ かなでは伝へ伝いしゝ物ゝ初ゝ出し又四ゝ頃
ふあり人禁秘ふ竜神をゝ人ツイ力ゝ也深壁恵梅抽
神宝秘ふ竜殿の秘を敬ゝ敬ゝ伝ツいゝあらびすし
久ゝゝのかゝにゝゝの声すらびその聲すゝしゝの色す
るゝあり増鏡巻百練抄ふ後深草院宝治二年十月
廿日内裏焼亡御竜神焼亡御伝ふ偽化る釜焼九
とゝあり九るゝゝ人ゝゝ禁秘抄ふゝゝ和御製ある
ふ竜神四ツゝ破る但掃ゝ合ゝゝ用之ゝゝ

一

釜ふ入あゝ竜ゝ成ゝとゝ九ゝ延式弐沿ゝ代実
録ふも竜神のゝ人ゝゝ清水細殿系ゝ七宮ゝし
ゝ乃化法御ゝ五大ゝ床ゝゝゝゝ床ふ苔ゝ
ちゝゝゝ人ゝ拍ゝゝいゝゝゝゝゝ
又拍ゝゝゝゝふゝ四ゝゝゝゝ人ゝゝ
ふ連海ゝゝゝ是御釜殿ふ禁秘抄ふ釜殿
ゝゝ必事ゝゝ

度羅人（ドラビト） 今昔物語巻十四云ゝ鎮西ふ住ゝ人
高ふ乃ふ数人船一般ふ乗て海ふ出ふ序ふ
法ふ乃ふ中ふ方ふあゝゝゝ乃沖ふ小ゝ海ふ人あ
ゝ神ふ乃ふ船ふ者ふ乃ふ海ふゝゝ食ふ物ふいゝゝゝ
ゝて舟ゝゝゝ海ふ上ゝゝ人ゝゝゝゝ人乃ふ者ふ

わやしも笠きて文船にのりて是成るにに山の方より罵る
ゝ烏帽子ふ白平水干袴着たるが百餘人ばかり出来て船の
もあたりにきたりてこともにころされもせんとして船をさしあるを
見てけりのこともおもひたれは船中のものみなおきてしたがふ弓ふ箭
兵杖を具したれば弓ふ矢をつがいて彼者どもの方へ近く
来るかゝ近くよせて射んとしけるにけ先にかの弓をとゞろかし
ふひとよみたるや笠ひたる者もしれざる山へ入りけり船の者ども
おそれおのゝきて漕出し急ぎ帰りて此事を人に語ふ
年老たるものいひけるは度羅島と云所なり形ハ人にて
人を食するなり案内知らずして其島にゆけば集り
来りて殺してとりて喰ふを是に依て人の中につよき
者て人に似ぬものなりけるものをば度羅人といふなり

れこなたかしこにてちりぢりにしてにげたるにて命たすかれ
近よりかゝて百千の弓矢をはなつとも彼等に九つにとゞまりたるが
叶がたしとてころされぬなりこれをしりてさけるは強わの人家
よおそろしきか語りける彼此つたへて語り伝ふる也○貞丈云世
人多のいひ伝へしは飲食の好む人を一呑よするなる
ことさらひのきんりとてらりのしるは右の度羅人より出る
る事度羅人といふは是も前よりいふ事にて近世の俗語なりあ
らび追考日本紀斉明天皇紀ニ随羅国トアリ随羅又云
都貨邏トモ見エタリ

一

俳諧　古今和歌集雑躰之部ニ誹諧歌トアリ是俳ノ
字ヲ誤テ誹ノ字ニ作ル也俳ノ音ハハイ誹ノ音ハヒ俳ハタハ
ムレト訓ム誹ハソシルト訓ム如此音モ訓モ同シカラス相通セザ

ルヲ也天篇俳反皆切雜藏也謎南尾切謎語也又
字彙ニ芳微切世方未切義同トアリ是ニテ其誤ノ知ヘシ
古今集ニ謎字ノ用ルハ賢之ガ誤ヲ定家ノ寫本ノ誤カ
歌學者流ノ徒其誤ヲ掩ヒ隱サントテ謎ノ字ヲ用ヒシ秘說
アリ八雲抄ニモ俳諧謎諧ノ二名ヲ出サレタリト云ヘリ雲抄ニ
名ヲ出シ玉ヒシモ誤リ也俳諧歌藏歌ヲ今世狂歌ト云ヘリ
モ差別ナシ謎ノ字ヲ用テハ人ヲ謎語ノ歌ト爾立俳ニテ
ハ父ソムシ歌ナリ

一

今世栗田口ト云名家ハ画工ハ昔栗田法眼光巖院御仰付ノ後亂
ニ非ズ元ノ種姓知ラズ享保年中江戸芝ノ赤羽根ト云処住
テ浮世繪ヲ画ヲ世ニ渡リシ者ナリ画ノ上手ナリシ故 召出サ
レテ御画工ヒトリ任吉内記廣守カ弟子ニナリテ土佐ノ風ヲ學ビ

タリ任吉ガ栗田ガ家号ヲ授ケタリトヅ昔ノ栗田只其一風
アリ今ノ栗田口ハ土佐風ナリ

一

任吉慶舟（元ハ板谷氏名廣富）元ノ生国大膳亮家人画工ノ任吉内
記ガ弟子ノ安永ノ比内記老衰シテ画ノ御用ヲ辭退申
上ニ依テ慶舟ヲ召出サレテ御醫師格ニ仰付ラレ画ノ御
用ヲ勤ム内記後ニ慶舟カ嫡男ヲ殺子トシテ新ノ巫ト云依
之内記任吉氏ヲ慶舟ニ授ノ板谷ヲ改テ任吉ヲ名乘ル
公官家且外 古人ノ像古画ノ圖ハ異形ニテ用ヒシカ
後小松院ノ叡慮ニテ古画ノ像ハイカヽトテ其時ノ画所
土佐守行廣ニ仰セテ画キ改ラレシハ今世ニ用ル処ノ圖ナリ
又元和比 後水尾院ノ勅ニ依テ中ノ院通村公百人

一首歌仙類ハ其古人ノ裝束色目又様等正シカラフトテ
住吉廣通ニ　勅命アリテ悉ク改テ色分ハ通村公ノ加
筆也又享保ノ比　將軍ノ御ニ依テ冷泉中納言爲久卿
右ノ繪本ニ極ノ奥書ノ加ヘ玉ヒシヲ住吉廣守拜領シテ其
繪本ノ以古人ノ像ノ画色ノ異又ハ悔或古画之風躰両
四變改也嗚呼

一

古画ノ武者ノ形ヨリハ鎧ノ袴ヨリ右ヨリ
袴ヨリ左ヘ結ブ　又ハ鎧通ノ
袖ヨリ右ヘ結ブ　肩ノ形ヨリ後ヘ流ヒ
ノ右ハ主命ノ神ヲ祭ル　神棚ノ後
右ヨリ結ブ　ヨリ左ヘ結ブ　神棚ノ後
古実ヲ知ル人彼袴ヲ人〻五流ヒ切テ右ヨリ

鎧ノ袴ヨリ左ヘ結ブ　ヨリ右ヘ結ブ　ノ事ハ左ヨリ
ハ源ノ袴ヨリ右ヘ結ブ　ヨリ左ヘ結ブ　ノ事ハ
やまと人ハ是ヲ結ブ　ヨリ右ヘ結ブ　ノ事ハ
右ヨリ結ブ　ヨリ左ヘ結ブ　ノ事ハ
うゐ右ヨリ軍勢ノ時ハ左ヨリ結ブ　ノ事ハ
ヨリ結ブ　ヨリ右ヘ結ブ　ノ事ハ
者ニ　ノ事ハ　ノ事ハ　近世ノ流行流ノ軍
ヨリ　ノ事ハ　ノ事ハ　ノ事ハ　武器ノ古實
ヨリ　ノ事ハ　ノ事ハ　ノ事ハ　故實ノ
ヘ　ノ事ハ　ノ事ハ　ノ事ハ　近世ノ流ノ
真ノ古実ハ　ノ事ハ　ノ事ハ　ノ事ハ　ノ事ハ
肝要ナリ　古実ハ　ノ事ハ　ノ事ハ　ノ事ハ　ノ事ハ

治世よりまた軍者たみの示をうけて推量の仏
て巧をなすとする利ゆえ伝説にて実用はたれ故実を
古人代々軍陣の用例ふる兵法を尋ねさるるゆえ故実
のオふ利方はあつうゆうこうとうこと一家も鍋陽の
ふうて人ぐるかの軍法のうちの利方は伝用すべう
況近世彼軍法諸ゆうるうゆう人多
偽書の奥ゆよ官本の以写之ト書或は名高キ人ノ
姓名判ト書クルモアリ是ハ偽ノ施テ其書ノ貴クシテ人
ヲシテ信セシメント欲スル謀計也愚者ハ信ズベシ賢者ハ信セ
ズ偽書而已ニ限ラズ高事上ノ威勢ノ益ニキテ強ノ事
ヲ貴クシ無理ニ押付ルコトアリ神仏ノ名ノ借ルモ同意也

萩生惣右衛門茂卿が秋風樂ノ笛ノ譜ノ唱歌ノ書ル者

一

ニ序シテ始テ知古樂歌章皆用和歌考之古史婦兒
輩猶喜樂若以華夏詩聲就爲俳離鳩古之
隣國之之ゝ伝ゝ伝ゝ為ル絃也吾国ノ言語を拵テ俳離
鳩古ゝ伝ゝ也吾ゆ夷狄ゆ之ゆ生ゆ此ゆ
在ゆ之ゆ伝ゆ也ゆ伝ゆ也ゆ他の国ゆ貴ゆ聖人ゆ在ゆ
ゆ聖人ゆ在ゆ人ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ
謂論語ふゝの論語ふゝ
此ゆ而ゆ茂卿ゆ伝ゆ
ゆて他ゆ也ゆ也ゆ也ゆ中華華夏ゆ孫ゆ
ゆゝ伝ゆ為ゆ心得ゆ遠ゆ之唐人ゆ為ゆ為ゆ
和国伝国差別ゆ和ゆ也ゆ也ゆ也ゆ也ゆ也ゆ也ゆ也ゆ
ハ吾国の惣号之伝ゆ也ゆ伝ゆ唐の国ゆ日本ゆ也ゆ

一

号とされ吾国の人心和らぎ吾国の人心ひ〻俗を
と云へり儒者のみにあらず我邦の人の知る字
に外国の人の知らざるもあり国俗なり〻〻俗なり
色〻儒字なりと云へ〻〻国字なりと云へ〻〻

一

今世流用の文通書状に字義も知らざる文字世俗番
て通用の俗字を用ひて学者へ〻学者へ〻略の字アヒルなど
カモ二用れ類なるものも知らざる俗用の書状に正字を用ひ唐
めき学る文言かゞ用ひ〻先方にあるも用ひ洛陽
事なり悪癖なり所機婦結〻書状の通機婦の二字は
仏書の語なり安者を訪ひ知るあるべき世を悲しき事
ば世上の孔背と云ひ〻こと理屈し字なもしやめて俗用
すべき所要なり〻〻為に書籍を編著するに至て俗字

俗語をさり字義文義を正さへ〻〻童蒙時俗の人
よまんと心ざしば〻〻刻俗語にて教ふべし
易きに学へ〻〻人世に何事か諺解俗解保諺抄等
と類とする書は唯国字を交て実なるものなり刻
ハむつかしく俗小説トかきて実和なるも実
学と如ぐ少なれども合点とすべきなるべし
まだ小学なる註なり〻〻先年予が同僚と同宮何某と云
人の医が学多日に肝積起り出仕なり〻〻（蓋肝積の海積と云ふ公義
尖ヲ対ミ是ニ事スナリ海ハ一病名出来タリ）て引時と刻なるに形
実に扶先段〻少て刻しと同療密に実設て刻しる
あること又あり〻〻（叙の病乳着酒俗と乳と云ふて着
病の字とすべ〻〻俗用集と云へ〻〻乾凝仕方と実なる

[illegible]

一 御鏡　延喜内匠寮式曰御鏡一面寸七分料熟銅大四斤白鑞大一斤四兩銀大十二兩熊皮五斤和炭五斤伊豫青砥鐵精二合帛二尺五寸綿四兩調布二尺油一合長功九人鑄二人磨大人中功九五人太子二九三人小半丈人小半短功九人小半二九七人丈人小半

○是天子ノ御鏡也

一 年忌　新国史曰仁和四年八月十七日於新造西山御願寺行先帝周忌御斎會北天苍島雛情三見五ヶ

一 太刀付護　館坊日野叙中器或宿老ノ郷高位人常金持之

一 ムスヒ　ムスヒ産子ノ字ハ高皇産霊尊ト書ク産ノ字ハ訓クヒ也ムスヒノ産ハ女ノ産ヒトシク男ノ分ハ女ノ産子也出ヲ子ヒトシクシテ子ヒトシクシテ生ル産モ同意ノ字ハ蒸ノ義ニテ陽陰ノ氣ニテ蒸シ出ス人ヲ産ト云ハ熟ノ義ニテ果ノ実ニテ自ラ落ル如ク月滿テ胎熟シテ出ル也

一 牛車ノ制料　延喜内匠式曰牛車一具屋形長八尺高三尺半廣三尺半輪料櫟九十七枚榾料槻二枚轅料轅料榎九枚轅輻料榎九枚轅風晒枚料歩板罫殿檜榑五村軸木一枚熟銅大四斤行滅金小皿両水銀小八両鐵四挺延濃五斤胡麻油荏油各四合掃墨二斤五合帛三尺石見綿八両調布一丈二尺伊豫砥二顆青砥二枚燒土五斤白綾五丈油絹五丈練絲五両出雲席二枚

羊毛ノ料染芋罕罕両炭十一斛和炭五斗斛銀小両鑵銅物料
洗芋一牧木賊七両糯米二升備髮元紅具絹三尺絲一
竹罕両筅九株染料茜大三百斤白木九斗黄蘗用度酢一斛二斗
生絹罕尺節料蓋扇布罕尺節料灰罕五斛竹別一斗五升米薪百五
十荷竹別荷染槽簾一隻長二丈以下広丈以上廣三尺以下二尺以上朱十五荷杓二柄水
麻笥一口受四斗水麻笥一口授二芋劉雀女罕夫人食
料白米二斗罕斗人別合酒一斗八升人別合魚二升人別合鹽二合
塗海藻三連塗切新銭二十文人別二百三人夫九人五論長短ノ切
一
桶ノ訓 延喜式ニハ桶事麻笥ヲイトト書タリ二百人分ノ如ク
竹輪ノ入タル桶ノナシ皆曲物ノ具ヲ物麻糸ヲウミテ納
ル麻笥田舎訓ヲウミヲ似タル故水笥ナトヽ書タル本ノ麻糸ノ麻
笥ヨリ出テ轉用ヒテ水麻笥トヲタル也職人歌合ノ繪

土佐光信画ニ檜物師カワケ物ヲ作ル躰ヲ画キタル傍ノ詞書ニ
ヨカケルモノニ孔ハ〻ヽ太ヲ入テ結ヒ付ケ入レタリ
ヽあり物ヲかけハ湯桶ノ此歌会ハ耳露寺新長卿ノ作ナリ
明應ノ比ノ人也其比マテモ桶ハ曲物ニテアリシ也又同繪ニ酒造
ヲ画メルニハ今ノ桶如ク竹ノ輪ヲ入タル桶ヲ画タル其比ハ高サ
テ湯桶ナトハ古風残リテワヲ物ヲ用ヒナヘシ竹ノ輪入ル樽ノ
一
袍文 或説ニ袍ノ文ニ轡唐草輪無輪違ナトヲ用ヒテ延喜
ノ比ハ無之トアリ延喜式ヲ見ルニ縫殿寮式ニモ織部司式ニモ石
ノ文ノ事見エズ又天子御袍ノ文桐竹麒麟鳳凰牡丹唐草
山鵲等ノ事モ見エズ何ノ御代ヨリ是等ノ文ハ定リシヤラン所見
ナシカノ式ニハ見エサル所其比ヨリ連綿ニテ入テ用ルカ未詳ナリ
画工土佐カ家ニテハ菅神ノ像ノ袍ノ文ニハ藻ニ花カツニヲ画

ノト云ヒ佐慶ノ冊ノ説ナリ 是又延喜式及裳束ノ諸抄ニ見ヘタル事ナリ
不審 年中行事ノ繪ニ藻ニ苍カツミ
文アリ後代此ノ見エタリ

一 三韓ノ職名 日本紀ニ三韓ノ職名所々ニ見ヘタレ其次第
不詳仍テ丹上通憲ガ著ノ孔三韓紀畧ノ文ヲ此ニ抄出ス
曰ク有土斯ニ有民有民斯ニ有長有長斯ニ有官故ニ不唯漢
地有官爵扶植之制唐變戎狄亦皆有号ノ所以但
渠右賢ノ著於漢史達魯花赤聞於元氏今舉ケテ三
韓職名之大較以見其貴賤ノ爲職品ノ畧ト○漢ノ洪
武八年新羅設官有十七等一曰伊伐飡二曰伊尺飡
三曰迎飡四曰波珍飡五曰大阿飡皆授ノ真骨ノ王族ナリ 六曰
阿飡自重阿飡至四重阿飡 七曰一吉阿飡 八曰沙
飡九曰級伐飡十曰大奈麻自重大奈麻至九重大奈麻
十一曰奈麻自重奈麻衍七重奈麻十二曰大舍十三曰舍
知十四曰吉士十五曰大烏十六曰小烏十七曰造位○魏
景初元年百濟設官有十六品一品内臣佐平掌宣
納ノ事内頭佐平掌庫藏事内法佐平掌礼義
事衛士佐平掌宿衛兵事朝廷佐平掌刑獄事
兵官佐平掌外兵馬事二品達率三品恩率四品德率
五品行率六品奈率以上服紫以銀華飾冠七品扶德
八品施德九品固德十品季德十品對德以上服緋十品文
督十三品武督十四品佐軍十五品振武十六品克虞以上
服青○高句麗官凡十二級見唐書本傳作高麗
一曰大對盧或曰吐捧一二曰鬱折ノ王三圖簿三曰大夫

使者四日帛衣頭大尼帛衣者先人也采国政三歳
一ど易ア善職則吾儿代日有右服則相改王爲閲
宮寺勝者聽爲之五日大使者六日大尼七日上佐使者
八日諸尼九日小使者十三日過節十日先人十一日右部大加
一 鹵簿 或書忘書曰行幸同之古事紀ニハ立キト訓ス三輔
黄圖ニ云車駕法從次第謂之鹵簿匂會云從天子駕
曰法從事物紀原云天子出行中楯有外餘兵有内故
曰鹵簿一云入ル梅匂會ニ鹵ハ大盾簿ハ矢室也ト云ル外
盾ノ用内ニ矢ノ用ニ不虞ニ備ヘ警護ノ儀也
一 公帖 同書云五山臨済ノ僧官位ニ帖ル帖公方家ノ詩
歌也首座以上授ケラル是又室町家ノ始リ
一 御下文 同書云公方家ノ御家ニ来地ノ充行ハ

庄又ハ成敗ナトノ類ニ付テ賜ル処ノ判物ハ殿端ニ下ノ一字
アリ中央ノ傍ニ公方家ノ御印ヲ押シ下ニ件ノ家人ノ官
氏実名ノ載セ其次ニ要用ノ旨趣ヲ書テ終ニ年号
月日ヲ記ス是当時断絶云ヘ○負文曰下文ノ文財東鑑ニ有リ
一 恐悦 庭訓往来七月ノ状ニ被引導奉行所者恐悦
候云々トアレハ恐悦ト云詞近年云ヒ一ケ条アリ
一 一筆 書簡ノ發端ニ一筆啓上ト云フ細川宗古法
印ノ書札抄ニ云一筆ト云ハ記ヲ略シテ云ハ
云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ

かゝりし花盛咲も雅ぞもちも啖すとなるを花盛と云べきを
むとてはなは歌一首をりと一筆して差出候へ一筆に
やかる人一筆書れ分に一定て候心え様子ふ今世ハ衣向忘る
志ろる礼式の状よ忘一筆ニ書之文一ひろニ認め候もりしみ状
の数ハ東中にも後篇ふ一筆ニ書てふ三度程手紙取りあられ
凡今世の風俗今遠へなとんくされし華月の様を詩に作ん
そ物するも婦ろいろ謝ふあふ此さ身はるて行也
誰ハとても詩ハ可役共世も凡ふ我しるつるもと

一 文書の綸作或字　當世ハ文字の偽作に差人の常学一字
書てさへ本文を出之差出礼式の古式に心寄てなきよるなり
近年書役ふなるを之本ハ商人など也作法の安れ書の形
よ出さるよりよるが近頃ハ武家にも婦ろさるる差人の常の様

なる様なりとも云へし商人の心ハ武士に似たる事もあり

一 捨古實　或人云古實を語て古のさまを志るし活なる
も人今の世の事をとよう知へハよれとも今の足を一理なる人へ世
のるりも俳諧中　営中の作法より諸士の地理風俗古実作法の
事まても知る人ハ猶よろしき人ハ此古る古を知りて古今に通達し
学ぶへや古実の事を知りて今のる事ハ此古のまりを知
て古実を志りてする事は事に於て聞る事をそて事済る
ともる人も今の事也ハ人も簸共當時知りする人多し
古実ハ忽ちなる事ハ古の事ハ知れるハ人なし故ども古實を
人ども凡ハ知を迄し古實ハ用ひ行ふとて今の事ニ是知る
へきれも小人ハ古の事を知るとて凡事は忠ありへし心の
因たるを知人ハるやまかの人ハ下戸る上戸人の心のと

そもそも腹中の疑ひを初さぐ記し初るものなり

一 神代 神君ハ国常立尊ヨリ神武天皇ニ至リテ幾百代ヲ歴ルなれども知ルへからス神代ニハ文字ナシ其代々ニ記録ナケレハ唯言語ヲ以テ傳ヘ名ナシ代数モ神ノ名モ忘レ名ルヲ多カルへシ應神天皇ノ御代ニ文字渡リ来テ後学文始リ書籍ヲ紀ス依テ上ノ神代ノコトヲモ聞傳シ趣ヲ書ク時ニ至テハ神代ヲ去ルコト遠シトシテノ間ニハ昔ノ語傳ヘ聞傳ヘモ漸々ニ忘レ来テ神君ノ名唯ナニ代ノミヲ忘レテ傳ヘ名ルヲ記シ留ムナルへシ其ナニ代ノ後代天神七代地神五代トテ此七代五代ハ忘ルヘカラス分ケテ此外忘レ失ハ幾百千代有シカ知ラサル也後ニ唐ノ書傳ニ渡来テ後彼土ノ年代ト此方ノ年代トヲ推合テ考ヘルに年数ハ相同フシテ

此方ノ神君ノ代数ハ説カニナニ代ナル故一神ノ年齢ヲ幾万千百歳ト後ニ配リ當ルル也幾億万千百歳ノ間ニ纔カナニ代ハ甚スクナシ是其神名代数ヲ忘レテ傳ヘルなれべし神代ハ天神七代地神五代ヨリ外ニハナシト思フ人見ナリ神君ノ名代数ヲモ右ノ如シ況ヤ神代ノ事跡ヲヤ其説正解ナキ奇怪ノ事諸説區々ニテ何レヲ正ト定カタキカ故ニ舎人親王日本紀ニ一書曰トカテ諸説ヲ上ル給ヒシ也ヒ神代ノ事ハ其書ノ文ノ中ニ見テ猥リニ牽強附會ノ穿鑿ナル妄説ヲ作テ説ク事勿レ今神代巻ノ解説スル者ハ神代巻ヲ富言辯言喻隠語ノ書トナシテ牽強附會ノ妄説ヲ作テ謎ヲ解カ如クシテ秘傳ノ如ク猶予カ著スル神代獨獨見トカ書ニ委シク記ス設書之

秘傳口訣トス取ニ足ラス

一熟線綾　延喜織部式云熟線綾一疋長四丈料絲六斤
二分織手一人共造二人○壹丹義知説ニ熟綾ハ縮線綾也
縮熟同音也ト云○自文按此説ハ下文ニ浮物一疋トアル
ニ對シテ熟ヲ縮シ云ナレヘシ　和名抄ニ云綾ニ有熟線綾長
連綾二疋綾花文綾平綾等名　長四丈廣二尺　料絲六斤三分織手八人造

一浮物　同書右ノ次ノ条　浮物一疋　長四丈廣二尺　料絲六斤三分織手八人造

一稲荷杉　或人問曰文ホ拾光後朝臣歌　ささらこそ
りよ初年のもりとしたりし杉もいまは茂りあひぬ
如何　夏文答　堀川次第百首稲荷清顯仲
いなりやまもりの杉をそなたにあふぎ人のなげ
とはいなりやまの杉の葉をこそたのまめ
夜なりなれば神のうゑしの杉を祝ひ
葉をこそうゑしなれ稲荷山のもりの杉を祝ひ

一七冒頭　堀川次第百首扇忠房　ふるひ
祝ひもあるぬぎ風つしのるるもの姿と○蝙蝠
扇のうゑ人ぬ陰ヒッかるうゑ七ッかるうゑ乃
れこ祝ふ　ものすぐ　ふもあるあ忘ヒッし云
ものてやつれ　ハいるさ　ていけるく

一イカノボリ　京調江戸ニテ　メコト云古代ハ　シラウシト云
和名抄雜藝ノ類ニ曰紙老鴟　辯色立成ニ云紙老鴟世間ニ云
師説　以紙爲鴟形乘風能飛ニ云紙鳶○古ハ鳥ノ形ヲ
作リタリ後代サマ〳〵ノ形ヲ作ル下ニ長キ足ヲ付タル体
鳥賊ニ云鯣魚ニモ似タレハイカノボリトスタコヒニ云ナリ
江戸ニテハ春ノ相撲ニテハ五月五日ノ凧ニ用ヒヘシ

一ヒコ俗ニ孫ノ子ヲヒコトスル誤リ之孫ヲ云ヒコ云孫ノ子

ヲハヒヒ（イトヨシ）ヒコトヒメ　和名抄ニ爾雅ニ云ハ子之子ヲ為孫ト和名
無百一ニ云北吉。曾孫爾雅云孫之子ヲ為曾孫ト
一　汗移　堀川次第百首ニ五節舞昌　りちゝ人のあらぶる野
とゝめるゆかりみのすゝはらうこゝろてゝ。夏衣
うらこゝとゝ。加文字よこゝろてゝ又さの字小ごる
ヒ也ー汗移乃字有ル世ニ誤ルてゝ
之ー
一　弟乃ちせちゝ国書九月九日忠房ノ元ニもあさちゝ
くゝえこゝろ人ゝ作ちゝ
一　侍従ノ大納言ノ紀貫之五位ナレ共後撰集ノ和ノ
土佐守行廣ニ命シテ四位ノ装束ニ画ニ人ノ
具定ニ可知ヲ又人ノ難ニ貫

之ノ装束ハ定法ニ非ス一流ノ習ヒアリト　貫之ハ四位ノ黒衣之人麻呂ハ白直衣ナリ
一　紫式部善悪　源氏物語ヲ書リ人ハ表ニ好色ヲあらハし
表ハ煩悩即菩提也即是空の理ヲ説て仏法ヲ
入ル志ヲ乃是ヲ凡人の才学ヲあれ観世音の化
身ヲ為ル之ヲ人の面ハ
康頼ノ竇如集ニハ紫式部ヲ
ハ化シ地獄ヲ
ヲ焼ヲ一日終ル
ヒ世ヲ地獄ヲ
ヒの此ノ人の説ヲ
ヒも地獄ヲ
ヒ地獄ヲ

て説竜しれハ支へうしにも妄説をなすべし罰まぬけ
如まなけれハ狐狸の類より外にハなし渾天の間よ
極楽といふ也なし地獄といふ知なし浄かれさう
ことしとゞふるなりの

一 史記封禪書曰後九年文公獲若石云于陳倉北阪城祠
之索隠曰語詞也○此云字ノ置迅常ナラズ用字ノ此者亦有之

一 大集經曰妻子珍寶及王位臨命終時不隨者唯戒布
施不放逸今世後爲伴侶○花山院此文ヲ見玉ヒテ
禁中ヲ潜ニ退テ出家シ給ヘリ嗚呼愚ナル哉妻子珍
寳及王位臨命終時ニ不隨者ハ佛經ニ説ヲ已知レタ
ルヿ也始ラ驚クベキヿニ非ス唯戒布施不放逸今世後
世爲伴侶トハ妄言爲詐也

俗ニ云巻十トヲ
云局ト書クハ誤也
局ノ字一クトハ云ヘス

一 世俗書簡 今世俗乃書簡の文ハ五十五六年以前ニ
諂諛の風盛になりしより一向ニ如弱の諸貴人へ送りし文
ニ今ハ同輩ヘ用ひ同輩ヘ縮りし文を今ハ下輩ヘ用ゆ年
前のことく西謡の時も所極と用ゆ所新建筋
追従諂諛ハ昔ことたれしものも其意味ハ今を
香とも成りしかも亦世ことなる諂諛の文言を用る諂諛
の文言を用ゆれバとて心よ諂諛を含の行ハ諂諛を
ぜハ何ぞハ 山風に吹きされても枝ひとつ松のみどり
のいろやりいふる 自笑

一 書籍一巻を俗ニ一局と云局ハ巻と同じことバ次局の字
なり五雜俎ニ云道書以一卷爲一局局ハ音軸今ノ人俗謂之
卷非也 書言文字考 和爾雅 道書ニハ道家の書也道家ニハ老

聊尤と元祖こして仙術を行ふ事を学ぶ者を云ふ
こと及び行ふ者を及ぶ士と云ふ所禱ある者と今霊祭ヲスル
儀道士も仏者と同じ仏を云ふ人を誑ふ事多く奇異不思
議と云ふ秦始皇帝前漢武皇帝唐玄宗
皇帝等仙術を信じて及ぶ所なる敵を求ふ神仙
仙術行ふ人唯霊魂の祭を行ふ者稀なり
邪法を行ふ事多し異言邪法を行ふ事多
ハ太乙神武皇帝と云ふ者を祭る其画像乱髪玄髻
亀形信二鬼捧劔の形也彼太乙即北辰也と云我国大唯
蔡のこと云ふ人也彼の説曽て行れたる事
浮屠氏妄言多く言ふ事深く信ず

也天下の人民愚者多く此代を事ふ人も行ふ
欲世の人漸々恩時よりて欲心増長する事随て冥
福と求め僥倖と願ふ事なり
一 予が奇秋ともの中に
此里の中に
予が如きの風流を好ふ人
ある人に予と茶賛あけの仕中にて
のりたれかよりぬるとしに
さもなん歌人のあるよ
侘あること
一 予素詩才少生に得ずしハ詩作ルこと敢詩ハ知
ず然に所詠ん詩ハ此に記す詩ハ読ム物ニハ非ス唐音ヲ以

フシヲ付テ謠フモノ也韻字平仄ハ師ノ云フ別ニフシ付テルナ
ニ吾国當時人唐音ヲ知ラズシテ作ル故句ハ巧ミナレ共
唐音ニ謠フ時ニ節滞リテ謠ハレヌ節アリフシ滞ルト云ハ
上聲去聲入聲ノ三ツヲ統テ一仄音ト号シテ仄字ニ置ベ
キ処ニハ漫リニ上去入ノ三聲ヲ心ヤカセニ置ル故入聲ノ字
ヲ悪シク置ケハウタフトフシノウツリツヽリラヌ柏子ニ
ナリテ謠シヌ上去ノ二聲モ平聲ノ字ヲ置ベキヲ去
聲ノ字ニテフシノウツリヨキモアリ去聲ノ字ヲ置ベキ
モ上聲ニテフシノウツリヨキモアリ又上去ノ処ノ唐音ニテ謠フ
誠サレハ善悪ハ知レサル人唯韻字平仄ヲ知テ巧ミニ文字
ヲ連ネタルハカリガ詩ニハ非ス文字ハ巧ナラスト雖フシ滞
リナク謠フニ障リナキヲ詩トスヘシトソ或人ノ談リキ

一和歌モ唯ノヤマトコトバヲ用ヒテ詠ムヲ
今ハ悲素ノ御今昔物語ニ俊頼師鎮源発奪ニ役ヲ
清輝懐紙ノ行ニモ詠ケレ発奪ヲ詠ケレ
ウヽヒヲ以テ講師モ行ハレ発奪ヲ故講ヲ
シヲ以テ講師モ行ハレ発奪ヲ故講ヲ
和歌ノ心モ知ラレバ地下ニテ知ル
八雲素盞嗚ノ尊ノ歌ヲ始メトシテ
ヤマトコトバノ歌ヲモ始メトシテ
ヤマトコトバノ歌ヲモ始メトシテ
ヤマトコトバノ歌ヲモ始メトシテ
ヤマトコトバノ歌ヲモ始メトシテ
ヤマトコトバノ歌ヲモ始メトシテ
ヤマトコトバノ歌ヲモ始メトシテ
ヤマトコトバノ歌ヲモ始メトシテ
ヤマトコトバノ歌ヲモ始メトシテ

これをぞ[illegible]ちいさこもしこの風俗実にみげ
[illegible]人世ちいさこの風俗はいとかたくある万人の
官人と進退をしめ日本六十六州及三韓帳庚をたと
[illegible]ちいさこの[illegible]
れたるよあり沒我神皇の朝廷の裏[illegible]敬[illegible]
仁政と[illegible]
万民安楽して天下恭平なりたりて詩歌管絃
乃遊びたるる[illegible]詩歌管絃[illegible]
事とのみ繁[illegible]
しらば終に天下の顧朝の掌握に入り

一 十幹十二支の名神代より應神天皇の御代王仁が来朝以

前にテハ知ラズシテ在シナルヘシ彼御代ナ六年二王仁カ来テ
具年百済國乙巳ノ年ナルヲ以日本モ乙巳年ナルヲ始テ
知テ支ヨリ年々ノ幹支ヲ知テ又逆ニ推シテ神代ノ幹支ヲ
知ルナルヘシ神代元ヨリ幹支ノ名有ラ百済ノ幹支ト符合
シタルニハアルヘカラズ

一 延喜式類聚雑要抄ナトニ長功短功中功トアリ延喜
織部式雑織ノ条ニ冠羅一疋長四丈廣二尺料絲五ノ斤十両織
手一人共造一人長功日三尺一寸無文八中功日九寸無文七寸
短功日七寸無文六尺ト見エタリ是ヲ以推シ考ルニ工匠ノ者ヲ
三等ニ分テ手ハヤノシテ物ヲ作ルヲ長功ト
シテオリノシテ人ヨリ物ヲ少ク作ルヲ短功トシテ長短ノ間者
ヲ中功トスルヘシ右冠羅ヲ織ルニ日ノ寸尺ヲ以考ヘシ共造トスハ手ツ
ノイナリ

一俗語　男子てへカミ前髪剃る事をゼンハツト云婚礼のイヒイ言と云イナフ結納の字用いひ旅行の餞を云ためらひ問いひ出る字用の事のイミアケ明忌のことキノイといひ喪中をモウチウ　喪服といひ墓詣をヒヤウサン廟参云類近年出る

一三神山　蓬来方丈瀛洲見子史記秦始皇本紀及封禪書方士之妄誕也

一具足　庭訓往来六月十日状に猶心所及可導進孚常具足と書云此具足鎧と云ことあり色々作異也

一薄紙　同往来七月状薄紙押厚之間所用及故也更に

紙厚紙薄紙　厚紙年号和漢文芸流布の子細あり　厚紙はコウシと云

一火印　同往来八月七日状火印追放以下随事軽重云云

火印罪人の焼印とあり　追放とは遠国へ追遣ふ事也

今世入墨と云ふ也

一神道二字出所　日本紀用明天皇紀曰天皇信仏法尊神祇云云神祇二字此二出タリ　此神祇とは天神地祇の二を云ふ

神祇の崇と敬と祭祀の勤ルヲシ云也　後代に巫祝の所謂神祇ト云ヲ意味異仏法ト異ル神祇ト紀見

前ニ神国ノ事

エメル故後代ニ云ル神道ノ様ニ聞エレドモ六ツ非ス巫祝ノ口実
トスベキ文也紛シ易キ文也能辨スベシ後代ニ神代ニ六神
教ノ説ヲ是ハ後代人偽作也紀ニ所謂ノ神々ハ偽
偽作ノ神代ノ事ヲ云ハル人ニ世ノ眼ヲ以古ノ丁ヲ見シハ
見ソコノフニアリ別ニ清眼ヲ開テ観ヨ

一摺字　玉篇曰力合之渋ニツ切敗也折也トアリ力合切音
ラフ之渋切音ヤフ也訓　ヤブル尼クジク尼シル尼ヲ也ムルトモ云
訓ハナミイカナル事カ中立以来吾国ニテ磨スルノ義ニ摺ノ字ヲ
用ヒ来シリ摺扇ノ扇也摺風ノ屏摺用ヲノ本ナリ此等ノ摺ノ字
折ノ義也磨ノ義ニテハ通セス又摺ノ字ハ追按ムルニ摺ノ
字ヲ用ルハ揩ノ字ノトリテガヘナルヘシ延喜式弾正式雑揩
色又揩清成文ニ云揩ノ字ヲムルトヨムナリ

延喜式縫殿式ニ云青摺布
移トアリ揩ノ誤ニテ今摺ヲ用ユ

一認字　玉篇曰而振而證二ツ切識認也字彙ニ曰而震ノ切
識物トアリ而振切ハ音ニシテ而震ノ切モ同ニ而證ノ切ニ音ニヤ
ウ也識認モ識物モシルル也記ノ字意也又シル也符字
意也物ノ目ジルシ也認旗トハ目シルシノ旗也俗ニシタヽムル
トヨミテ書クヿヲ認トハ記スノ義ニ又俗語ニ物ヲ調ル
ヲトリシヤムルトハ取認ト書クハ義通セス飯ヲ食フヿヲ
シタヽメヲスルトハ義通セス

一役役字　役ハ正字ニ役ハ俗字ニ二字共ニ義同ニ字書正譌
云ハ人荷役行役之意ニ俗ニ作役　那然ニ今惟从イ而不
从人矣

一作字小補韻會曰助駕切詩韻箋作　西辭也トアリ
和訓ナカラトヨム彼是西事ヲ兼帯ニタル詞ナリ

一乃字イマニシテハナハチ氏ヨム。ナンデモヨム日本紀ノ訓 海ノ字ノ
イマニシトヨム然レハイマニシトハナンテ古語也儒書ノ訓點ニスナ
ハチトヨムヘキ助語ニイマニシト訓ヲ付タルアリ誤也スナハチトヨムヘシ
又儒書ニ無乃ノ二字ムシロト訓ヲ付タリ無乃ノ乃ハ玉篇ニ
奴改切ト説文ニ曳離之難也トアリ曳キ離レントスルニ離ロタクヒ
キレテ詞之無乃トハ則曳キレテアフナク離レシトスル意ノ人ニ世
ノ俗語ニテハ。ナンノカノトハスミロツハリト、ハ意ナリ

一ヘ字 行カナニモイロハニモアリ邊字ノ辶ヲ省キタル也ハ氏ヨ
又ハ乃ヘハ字之氏ヨ又つ字也氏ヨ諸區ヲ也又ハ心ノ別ノ古
字乃省タル也トハ説モアリ何氏漢字ノ省文トクルハ非ナル
ヘシ乃ハ考ハ是ハ上古吾岡謠又ナルヘシ乃ヘ木ノ末
ハ乃ヘ木ノ類ト一ノ偏ナルヘシ小野道風カ真蹟ニハヘ
ノ字ヲ乙如此書ケリ

一神道ニ様々アリ。両部習合神道。社例傳記神道。元
本宗源神道。唯一神道等也是皆様々ニ道理ヲ付テム
ツカシクコシラヘタル者ニテ後代ノ作爲也此外ニ天社神
道トヨアリ是ハ土御門家安倍氏陰陽家ニ盛ル神ナルヘシ天一神金神萩翔末泰山府君ノ
類ヒナルヘシ

一煉茅ヲ製スル法ノ事 牛ノ茅ヲ煉ル也長門牛ヲ最ト
ス膠ノウスノ煎ヒテ冷シテ其膠水ニ牛茅ヲ浸シテ心ニテ水
ノ透ヲ入レ取揭ケテ堅木ノ盤ノ上ニノベ數ヲ鉄ノ槌ニテ
ムラナリ打ツヘシ打テハウスクナル迄三日ノ間打テ後表裏ニ
石灰ヲマブシラスツツ日ニ乾ス也是ヲ以鎧ノ札ヲ作リ又煉

鐔ツバニスル之革ヲ厚クスルニ革ニ枚或ハ三枚重テカテハ一ツニ付キテ厚クナル也カ盤ハ堅木也切口ノ方ニ革ヲ置テカツ之右鎧工岩井某カ傳也 ○ 白丈梅煉革冬月寒中ニ製セハ革ノ性強クシテ虫ヲ生スル事アルマシキ也夏月ノ製ハイマダ乾カザル内革腐ル故ヘ性弱クシテ虫生スルヿアルヘシ又梅華乾クル後漆鍛ノ肉ヲスリ付テ乾スヘシ或ハ漆鍛ヲ燒其煙ニテフスヘタルカヨシスヘテ軍器ハ如此スヘシ虫ヲ生スル事ナシ

一 地震神 日本紀推古天皇七年夏四月乙未朔辛酉地動テ舎屋悉ク破則令四方俾祭地震神 ○ 何ト云神ト云ヿハ知レス唯地震ノ神ト云テ祭リタルナルヘシ

延喜内藏式
木綿一斤

一 木綿 類聚国史ニ桓武天皇延暦十八年崑崙人木綿種ヲ持来リシヲ十九年諸国ニ植サセラレシ由見エタリ後代絶タリ夫木集ニ衣笠内大臣建長ノ比ノ人 歌ニシキシヘヤ大和ニハアラスカラ人ノウヱテシ綿ノタネハ絶ニキト見エタリ其後年月ヽ知ラサレ氏再ヒ渡リタルカ玄恵法印建武ノ比ノ人庭訓往来十月ノ状ニ襖單衫之花綾木綿等一ツ配ルト見ヘタリ夫ヨリ未ツヽキテ在ルカ楠村市郎右衛門尉長高天文永禄比ノ人室町殿日記ニ天文九年ノ状ノ文言ニ中間衆ノ木綿二十五疋買取トアリ貝原茂十郎好古カ和事始ニ文禄年中ニ再ヒ渡ル由見ヘタレ氏庭訓ニ見ヘタレハ夫ヨリ前カラアリシナリ類聚国史ニ見エタルハ木綿ニテ庭訓以下ニ見ヘタルハ今用ユル処ノ草綿カ未詳

一 遜位之帝称院ト 神皇正統紀巻五白川院ノ記 昔ハおりゐの君ハ朱雀ヨリシテアマタ後院トテ冷然院ナト

かゝりるようの所にてまやのハたの白河ようなるハ名勝
とゆうて上皇の御所と宮これなりりたる
○夏之末雅院も冷然院も御所の名也 此二ツの
御殿とまたゝ後院ことも也右二ツの院宮の故なり
へゝ 仏法の院号の故なり

一蠟燭 職員令主殿寮曰頭一人掌中書燈燭松柴燎義解
曰謂油火爲燈蠟火爲燭 ト見タリ 今ハ元大寶元年
二定ラレ養老年中更ニ明定セラル義解ハ天長二年二
撰ル右ノ文 此ニハ其比既ニ蠟燭在シ也和名抄ニ蠟燭唐
式ニ少府監毎年作蠟燭七寸挺トヨリテ和名ハナシ和名抄
撰者源順ハ天暦ノ比ノ人ニ其比蠟燭尋ラアルヘシ 和名ノ
記サルハ和名ナキ故ナヘシ和名ナキ ノハ吾国ニ作ラズシテ
唐ヨリ渡リ来ルヲ用ヒラレシナルヘシ本外国ノ物ナル故禁中ニテ
ハ不用之 油火ヲ用ヒ燈臺ヲ用テ燭臺ヲ不用之

一皇代數 俗ニ皇代ノ類フルニ神功皇后ヲ五代ノ内ハ誤
也神功皇后ハ帝位即キ給ハズ故ニ皇代ニ入ラズ古事記ニハ
皇后ノ事ハ仲哀天皇ノ紀ノ中ニ載テ別ニ紀ノ立ヲ日本紀
ニハ皇后紀ヲ別ニ立テシ故後人ノ思ヒ誤テ代数ニ入テ十
五代トシタル也 旧事紀ハ偽書ナレハ云フニ足ラズ

一神書 正ニキ神書ハ古事記日本紀古語拾遺此三篇ヨリ
外ニハ無之 旧事紀ハ古キ偽書也聖徳太子ナ藤我馬子
カ名ヲ借リテ偽作シタル者也偽作ノ明證多シ其外
伊勢十二部ノ書ヨリ以下類篇皆未書ニテ仏語仏理
交リテ清変ナラス或ハ儒教ノ神語ニ偽リ作リタルモアリ

山崎沁書ニ多ノ人アリ佛ヲ云人ニタレハ阿ル人多シ儒ヲ云
ニタレハ阿ル人ナシ何ソ私スルヤ

一本尊　佛道ニハ阿弥陀ノ本尊トシ道家ニハ太乙真君
ノ本尊トス神道ニハ天照太神ノ本尊トス儒道ニハ天ノ
本尊トス上帝ト稱ス何レノ道ニモ本尊ト
云者ナケレハ事ニクサビナキカ如シ道ハ元　人作ル也作ル法アリ

一書名冠本朝ニ字　書籍ノ題名本朝ノ字ノ冠ラレタク
ル者多シ本朝ト云ハ偽朝ニ對スル稱也吾國ニテ尊卑ノ凡
元弘建武ノ比四人ノ天子在リシ内ニハ相互ニ偽朝本朝ト
稱シ互ニ其ノ前後ニ偽朝ナレハ本朝ト稱スヘキ事
ナシ唯外戚ノ国ニ對シテ本朝ト稱スル而已也聖ノ書。

コレヨリ二テメ列女傳アリ列仙傳アリトスルモ此如多ク文ナルヘシ

頼朝卿奉行被仰下大臣八尺大納言七尺中納言六尺参
議三位五尺四位二下四尺云云

一礼服御冠　百練抄ニ云後嵯峨院仁治三年三月廿日庚寅礼
服御覧天子御冠破損無其形仍可被新調云云

一戴冠　百練抄ニ云後嵯峨院寛元三年閏月一日今日春宮
御戴冠也大夫公相卿奉把之傳持之御所近々之間無御
劔役人云云　戴冠ノ事紫式部日記古事談拾遺等ニ見ヘタリ小兒ノ祝事也

一移風易俗　自文云移風易俗ト云ハ聖人教ヲ施シテ悪キ
風俗ヲ善キ風俗ニ移シ易ルヲ云也聖人ノ教ハ時代風
俗ニ隨テ悪シキ風俗ヲ移シ易ヘ悪シカラヌ風俗ハ改ルニハ
及ヒサル也然ルニ今ノ儒者ハ吾国ノ風俗ハ賤キ風俗也ト思ヒ今
日ノ世俗ノ人事ヲハ何事モ鄙俗也トシテ万事唐人風ニ改事
ヲ好ムハ聖人ノ道ヲ知ラヌ者也聖人ノ道ハ其国ノ風俗ニ乖

テ唐人ノ風俗ニナレトトニ云教ニハアラス孔子今ノ日本ニ渡ラハ
月代剃テ麻上下ニ刀脇指サシテノ孔左衛門ナトヽ名ヲ付ラルヘシ

一義貫謚字オクリナトヨム説文ニハ謚ニ作ル今ノ文謚ニ作ル誤
リ也オクリナノ中ハ音ヒツ也韻會小補ニハ本韻常利切ヒ
清又伊志切ヒ倍又云陌韻伊昔切ヒ音ヲ集韻笑白ヒ見エ
タリヲキノ音ニヨノバヲ笑ヲ白也オクリナニハアラス謚号ヲヲキ
号トハ誤リ也ヲキノ音ハ謚ヲ謚ニ作リヒヨリ益ノ聲ニ
諧テヲキノ音トスルナルヘシ後代ノ音ナリヒ

一不遑毛舉　先年戸田友山岡俊明問曰庭訓往来ニ列仙
傳アリ列仙傳アリ文選アリ蒙求アリ故ニ彼書ニ擬シテ編
タルヲ本朝列女傳本朝列仙傳本朝文選本朝蒙求トヽ号シ
タルハ異朝ニ對シテ云ナレハ是ハ理ナリ異朝軍器考トヽ云書ナキニ
本朝軍器考トヽ号シ異朝ニ住節録トヽ云書ナキニ本朝住節
録トヽ号スルハ如キハ理ニ叶ハス西土ニ爾雅アル故和爾雅ト
号シ里ニ荆楚歳時記アル故日本歳時記ト号スルハ
理ニ當レリ西土異朝ニ對スル義ナクシテ本朝日本和等
ノ字ヲ漫ニ書名ニ冠シムルハ誤リ也凡儒者ノ癖ニテ
身ハ日本ニ在ナカラ心ハ西土ニ爾雅アル故和爾雅ト
号シ里ノ異心外ニ見ハル事アリ誤リ謂ツヘシ

一官職稱　近年儒士ノ著セル文ニ今ノ將軍家ヲ指シテ
謂フ官ノ字ヲ用ヒ朝ノ字ヲ用ルハ誤也官モ朝モ天ノ
事也賴朝以来日本国ノ武家ニ奪取ラレシ所ノ皇位ヲハ
奪ヒ取ラレタル天ノ位ノ眞ノ君臣ノ礼ハ乱レスシテアレ天ノ指シ
テ官トヽ云朝トヽ云ハ如ノ称ニテ変改スルノ有ラスヲヲノ

称ヲ以將軍家ニ称スルハ非礼ナリ將軍家宣非礼ノ悦ヒヲハシ
ヤ儒士トシテ礼ノ知ラズハ誰カ礼ノ知ラン今世トテモ天子ノ出
行ノ行幸ト云ヒ將軍ノ出行ヲハ御成ト云天子ノ言ヲ勅宣ト
云ヒ將軍ノ言ヲ上意ト云ヒ混雜ヘカラサルヿヲ知ヘシ君ヲ弑
シテ帝位ヲ奪ヒ取ル外国ノ文章ト同風書ハ誤ル也或
説ニ上意御成具外御老中御側衆ナトノ役名ハ俗語
ニテ漢文ニハ書シカタシ云ヘリ是又謬也上意御成ノ類ハ足利
將軍ノ時ヨリノ天下ノ通法ノ称也俗語也トテ通法ノ敗
ル事不可有御老中御側衆等ノ役名モ今天下ノ通称也
武家ニテハ官職ト云フヿヲ役ト云ヒ是亦天子ト差別ナセル
称也今ノ役名ハ俗也トテ私ニ唐ノキノ官名ヲ作テ書ハ將
軍家ヲ賤シムル也此ノ事唯當時ノ正称ヲ用ヰ也唐代

ノ人當時ノ官名ハ俗ノトラ漢ノ代ノ官号ヲ用ヰル例モナリ
元ノ代ノ人當時ノ官号ハ胡俗ノ称ヘトテ別ニ官号ヲ作テ
文章ニ用ヰル例ナシ右ニ所謂ノ或説ノ如キ人ノ文章
ハ當世一場ノ弄戯ニ備ル歟文ニハサモアルヘシ百代ノ
後ニ遺スヘキ文章トスルニハ足ラス

藪醫　庭訓往来ニ十月ノ条雖相孚醫習之仁候上
藪醫即者問見来ル故和氣丹波之典藥寮ニ成ル難
逢ヒアリ藪醫源公ノ世ニヤフ藪医之下手醫者
のゝもと藪医名ヿ云ヒ藪の字ヲ付テ侮ノ説あり
何ノシ迂遠也。身文梅やぶしりハ野史ヲヨメ藪の
字ハ詩ヨリ例ハあて字なるへし下手醫者ハ名家ヨリ
招ルヽヲ藪ヨリ唯因史ヲ人の病を療するのミ

故ニ野犬醫者トシテ多クヘ

一 隼人習吹　日本紀ニ隼人犬ノ吹ルニヲヲスル事見ヘタリ

延喜隼人式ニ凡今来隼人ニ大ニ習吹五發本聲ヲ

右發未聲惣大聲十遍小聲一遍訖　人更發細

聲二遍（大衣トニ人隼人ノ内ニ大衣トニ有アリ　同式ニ元

候時令吹之者　大衣樺諸蕃内　置五色各一人　大隅各五河多各五　○教道隼人

中省即申官神之　又曰今來ノ隼人發吹聲三節　補落入朝來

有吹聲ノ下ニ云其官人著當色横刀大衣

一 當色　右ノ文三聲ノ下ニ云其官人著當色横刀大衣

及番上隼人著當色横刀白赤木綿身形襪白余隼

人皆著大横布形（襟袖著　西面襴）布袴（著西面襴）紐帛有甲横刀白

赤木綿身形襪ヲ番上隼人已執楯槍並坐胡床

一 肩甲右ニ見タリ肩甲（或ハ用鎧ノ婦人ニ限ラス隼人モ服之　字ヲ民ニ同ジ）

一 五百歳而聖人出　史記評林讀史總評曰周公五百歳而

有孔子孔子五百歳而在斯乎○自文云年限不足

信之孔子没而後至于後漢光武皇帝建武元年ニ凡五

百三年有ニ何聖人乎（俗説ニ聖人ハ五百歳ヲ歴ハ必ト云ヒヨリテ記之也）

一 東字訓　日本紀景行天皇紀二十八年冬十月壬子朔

癸丑日本武尊東ノ虜ヲ征ンカ為ニ發路シ玉ヲ上總ニ至リ

玉ヲテ海中暴風起テ御船漂蕩テ渡ラレス弟橘姫カ御

船ノ没ヲ聞ハ是必海神ノ心ナラン願クハ妾カ身ヲ以テ王ノ

命ヲ贖ハントスルニ海渡入玉ヘハ風止テ船岸ニ着ヲ得タリ

カクテ後武藏上野ヲ歴テ西ノ方碓日坂越ノ至リ玉ヘ碓ヲ

嶺ニ登リテ東南ノ方ヲ望ミ見テ弟橘姫ノヲヲ思ヒメ

シ出シテ三ヒ歎テ吾嬬者耶ト宣ヒシ故ニ因テ山東ノ

諸国吾嬬国トスヨシ見ヘタリ然シハ古書ニ東国トアルハ

景行天皇二十七年ニテノ一ヲ記シタルニハ、東ノ字ニアツマト訓ヲ付ヘカラスヒカシトヨムヘシ二十八年ヨリ以後ノ事ヲ記シタルニハアツマト訓ヲ付タルモ妨ナシ神武天皇ノ東征ヲアツマヒチヒラト訓ヲ付タル書ニヨルニ依テ此事ヲ記シ置タル也

一 兒名　古事記巫仁天皇紀曰凡物語子ノ名ハ母必名ヲ云上古ハ産ル兒ノ名ハ母必名付ル事吾国ノ俗ニアリシ也今ハ父又ハ伯叔父外戚ノ名付ル了ニ成シリ

一 平維章カ篠崎金吾和学辯云日本紀ハ舎人親王太朝臣安麿ノ紀清人三人ニテ編集之ニ世人舎親王ヲ知レル安麿ヲハ知ラス清人ヲハ知ル人更ニナシカヽル事ナリ人ヨシハ三人ナリテハ知ラス清人ヲハ知ル人更ニナシカヽル事モ其人ニヨリテ其名ノ傳ルトツタフトヲ不審多カラン夏文云紀清人日本紀ノ撰者ニヨカリ續日本紀元明天皇記ハ見ハ舎人ハカリノ名ヲ出シ弘仁或ハ序ニハ舎人親王太朝臣安麿等奉勅撰也トヤリ

道鏡ハ法皇ヨリ天却テ皇ヲ貴ニ

一 法皇　和学辯曰法皇号ハ寛平上皇始ルト云ヒ実ハ号制ノ道鏡ニ起シリ然シハアテリイミジキ御名ハアラジケレヘ祝髪十九ヒ太上皇或ハ仙洞ト申奉ラハ誰トカ名者モアラサラテシ○貞文云仙洞ト云ハ御所ノ祝号也法皇太上皇等ノ尊号ト一類ニハ非ス誰ヒ処ニ者アラジトハ誤ノカ上ノ処ニ者ナケレヘ之

一 萬多親王　和学辯云姓氏録ノ編ニモセシ萬多親王此萬多ノ和訓イカニ○貞文云萬多ハ音ニテニクトヨム ヘシ日本後紀曰延暦九三年正月戊寅改茨田親王名唐萬多ト見テヤリ是名ヲ改タル二非ス名ノ文字ヲ改タルナリ和名抄国郡部郡ノ名ニ河内国郡名茨田萬多ト見ヘタリ然シハ茨田ノ字ヲ改テ萬多ノ字ヲ用ヒラレタルナレハ萬多ヲトヨムヘシ。一クトヨムハ非也維章カ博覧ナル

日本後紀ニ和名抄ハ見ツラニ心ツカズシテ萬多ノヨミヤウヲ知ザリシ也

一 和學大辨 平維章カ著述也博覧ノ所為ニテ俗儒庸才ノ及ナル処也其書ノ中ツレ〳〵ノハフレニタレドノ章ニ古言ヲ知ラヌ故ノ二ヨミ也ト書ケリ然ルニ維章モ古言ニハ未達セザリシニヤ橋ヲバシ濁リノ章ニ中比ノ人ノ文章ニテノヨミチカヒタル事ヲ強テ法ニ云タルモオホカメレト書ケリ此文意ニテノヨミノチカヒト云ヒチガヒニテハ語脈通セズヨミナカヘト云チカヘト書ヘキ也又メレト云詞ハ上ニコソト云詞ナクテハ通セズタトヘハ子カハシカルヘキ事コソオホカニメレノ類也コソト云詞ナクテメレト云テハ語脈通セザル也又魯論ノ辨ノ矣仁ノ章ニ今ノ讀法ヨリ抜群ニナラメト書ケリ是モ上ニコソト云詞ナクシテ下ニナラメト云タル故通セザル也。云ベシ。云子ヘバレト云ニハ上ニ必コソト云詞ヲ置ザレハ語結ヲサル〳〵ヘ語脈通セザル也古歌ヲ以考テ示ス云処ノ違ハザルヲ知ルヘシ是ヲテニヲハノ法ト云也法ニハアラズ古言ノ自然也後代是ヲ法トハ云ヒ習ヒト云

一 舊事大成經 禅僧潮音カ偽作ノ書也 和學辨ニ云摂津ハ本国名ニ非ス速速氏浪華氏書リ今ノ大坂ハ西海道ノ諸国ノ船着ナレハ津ト云ナリ昔此処ニ津吏ヲ置リ其役所ヲ摂津職ト津ヲ摂スル役ト云事也委ク大寶令ニ見ヘタリ其後桓武帝ノ時州ノ名トセル事日本後紀并三代格ニ見エタリ大成經ヲ偽作セシ人ハルヿヲ知ラズシテ昔ハ瀬津国ト云シト書シハ其文言ニ云ニ方ナシ〇楼秋斎カ説ニ大成経ノ中ニ這箇ノ二字ヲ所々ニ用ヒタリ此二字ハ宋朝以来ノ俗語也聖徳太子ノ作ト云書ニ宋朝ノ俗語ハ有マシキヿ也

トゝ云ヘリ 聖德太子ノ在世ハ隋ノ世ニ當シリ 来朝ハ三百年ハカリモ後ナリ 此外精シク穿鑿セハ猶
僞作ノ證據多カルヘシ歷々ノ學者多ク大成經ヲ誕カサ
レタリ 大成經ノ中礼綱本紀刊行シテ 廣ク行ハレ學者引用アリ

一國名 和学辨云伊賀變ニテイカトナリ 伊勢變ニテイセトナリ志摩變ニテシマトナリ 駿河變ニテスルガトナリ又變ニテスホトナリ 武藏變ニテムサシトナリ 安房變ニテアハトナリ 飛彈變ニテヒダトナリ 信濃變ニテシナノトナリ 佐渡變ニテサトトナリ 但馬變ニテタジマトナリ 美濃變ニテミノトナリ 因幡變ニテイナハトナリ 播磨變ニテハリマトナリ 安藝變ニテアキトナリ 讃岐變ニテサヌキトナリ 伊豫變ニテイヨトナリ 壹岐變ニテイキトナリ 肥後變ニテツイヒトナリ 又變ニテツシマトナル中華ノ音

ニナラヒシ證據也是ヲ眞ノ漢音トスル今世ノ学者ノ漢音呉音
トスル大ナル誤也唐以前ハ漢音トスル唐以後ハ唐音トスル唐
音漢音一致也今世ノ漢音トスル段々アヤマリ來リテ漢ニテモ
アラス呉ニテモアラズ和音ノ一種トナシリ又云平上去入撮口合
口開口ニテヨム事ヲ人々皆知ラズ何ノ是ノ漢音トスヤメ
シヘハ朝ノ字ノ唐音ハチヤウトヨム今是ノチヤウト誤シリ東ノ字
ノ漢音ハトウトヨム此ノ所カナ出來サルニヘニウノ假字ノ借クテトウ
トカナシハトウトヨムニセニ屬ナルニ後世ニ誤テ東ヲトウト讀ムヽ貞
文按伊賀ハ唐音ノイガウノ借ラズ志摩ハ唐音ノシイマノ
借ラズ吾國ノ音ヲ以イカ。シマト書クル也餘モ是ニ准シ
知ルヘシ日本紀ニ持統天皇五年九月己巳朔壬申賜ノ
音博士大唐續守言薩弘恪書博士百濟末士善

信銀人二十両ト見エタリ此年ハ唐ノ代中宗ノ嗣聖八年ニ
當レリ是吾国ニ音博士ヲ置テ唐人續守言薩弘恪等
ヲ招キ留テ音博ナトナシテ唐ノ音ヲ教授セシメシ大学寮
ノ儒生是ヲ學ビ傳ヘタルガ今世ニ傳レル也然ルニ吾国ノ音
ト後代明清ノ音ト相違アリ年代遥ニ歴タルナレハ吾国
ニテ傳ヘ誤タルヿモアル故西土ニテハ宋朝以来胡狄支那ニ
多ク入リ留テ国ヲ爭ヒ終ニ北狄ノ為ニ大明滅サレ韃靼人
天子トナリ国ヲ清ト号シ韃人国ニ充満シタレハ古ノ音ハ韃
靼ノ音混合シテ人ノ唐音ニナリタルモアル故考ヘ正シキ事也
偏ニ吾国ノ音ハ誤リニシテ人ノ唐音ハ漢唐ノ代音易ル事
ナキト云證ナシ又云ヒノ序カナ出来サル前ニウカナヲ備ヘテ
ウト分シハトニヲヨリヒセシタメ也トハ無理也。ヒカナヲ片ハ公

ノ字ヲ用ユルヿ古ヨリハ子タル詞ニ用ル也ハヌル詞ニウヲ書ク
事萬葉集ナトニモ例ナキヿ也

一 梶原氏家紋　源平盛衰記巻三十五義經院參ノ條ニ云
大文字ニツヽ書タル直垂ニ黒糸威鎧ハ同国住人梶原平三
景時子息景季生年二十三ト名乗ル○土佐国吉山内氏家臣
ニ大庭源之助ト云者家ニ古キ幕アリ先祖ノ幕也ト傳フ
其幕ノ紋大ノ字ノ下ノ傍ニ二ノ字小ク書クリ大ニ如此ノ紋也
梶原ト大庭トハ同家ニ故ニ名乗ニ両家氏ニ是ノ字ヲ付也
故ニ幕ノ紋大ニツヽ付ルナルヘシ彼源之助ハ唐流ナル故大炎ヲ用
ヒシテハ炎ノ代リニ大ノ下傍ニ二ノ字ヲ大キニシテ大ニ如此
シテハ二ツ引両ニ似タレハ大ニ如此シタル歟

一 雞ト鼠ト　史記封禪書曰亦祠天神上帝百鬼之而

以雞ト云ヲ註曰漢書音義曰持雞用ト如鼠ト云ヲ正義
曰雞ト云ハ活用雞一生祝願訖而殺雞狗煮熟又祭
獨取雞兩眼胃上自在孔裂似人物形則吉不定
則人ヲ顧南猶行此法也

一大占　古事記曰爾天神之命以布斗麻ホト相而詔云
云云又曰召天兒屋命布刀玉命而肩抜天香山之真
男鹿之肩抜而取天香山之天波々迦而令占麻迦
那波○日本紀一書曰時天神以太占而卜合之（右上巻三）又
曰天兒屋命主神事之宗源者也故俾以太占之卜
事奉仕

一竈輪占　宋占　言語拾遺曰於是大地主神令厚巫志止止利
拔巫乃來占具由○志止止利モ占ノ名歟

一亀ト　日本紀欽明天皇二十四年六月遣内臣狛使於百
濟中書（略）初曰中書又ト書曆本種々藥物可付送ト見エタリ
此御代亀ノ書ノ求メヒシ也此紀ヨリ前崇神天皇紀（七年ノ紀ナリ）
命神亀ノ二字アリウラベト訓ノ付タリ是ハダウラナラトヽ
義ニ依テ合神亀ノ二字ヲ借リテ文ノ節ニ用ル也此時亀トアリ
ミニハアラス此ノ丁文ノ見ヤウニテ大ニ義ヲ取ツヽナフ事アリ仍テ
記シ置ナリ

一五月吾百草ノ雨ヲ黒焼ニシテ功能多シ百草ハ何々ト定ルナシ紫
花（ウラヒラノ花ヒラノ花ヒラ）久ベ（ウラビ田ガラビ元治生ル草ナリ）トウダイ草（ヒヤウリ元文トリ冬ノ花）此二草
ヲハ百草ノ中ニ入ル丁アルベカラズト申ス書ハ二ツノ忌ムベキ疫病ノ
發ル日未明百草ノ黒焼五分丹草粉一分交テ汲ル水少シ
ヲ呑ハ疫治也（但シ四五月ノ比ノ草ノ用ル也後ニ用ル事アリ）此外能多シ

一楚割　ズハヤリトヨム木ノ楚ズハエノ如ク奥内ノ細長ク割テ乾クル也ズハエリリヲ略シテヨムハヨシトヨムハヨシトヨムハヨシト

てゆる人間やよをうつりけの中ハ白木のまゝにて黒ぬりに
○臭文云色〻色〻の変化の変化の変化唯〻白木なり ○又嘉樹云或説云柏交て
名付るゆゑなの云ゆゑ備前国にて柏と云字を云ふ
とそ和名抄に云ふ又一説に恐怕のかしこまりもゆゑ
速水常の俗名恐怕遷て纓の借と而て中ゆゑあて変
むし恐怕交ゆゑしの名ゆゑんしゆゑ又其心とする
説也と○臭文云ハ雅楽寮合院
殿装束抄に柏交の雅楽云雅亮
ひとり〻〻ゆゑとして云ふ
て冠ゆゑ〻〻ゆゑ口ゆゑの
んゆゑひとりのゆゑなる
つゆゑ〻〻ゆゑの云ゆゑ柏交

のゆゑとして〻〻ゆゑ〻〻ゆゑ〻〻ゆゑの異説
假髻の字ゆゑの詞ゆゑ外ゆゑ例の備字ゆゑ柏の字を用ひ
たるゆゑ〻〻 行器ゆゑ柏の生ゆゑ 偽ゆゑ用ゆゑ例ゆゑ
ゆゑが新考ゆゑ右の装束抄ゆゑ柏交ゆゑ〻〻ゆゑの〻〻ゆゑ
て考ゆゑ ○又云中將ゆゑ武正の時ハ冠纓ゆゑ
常ハ帝纓ゆゑ速水常ゆゑ
柏交ゆゑ中ゆゑの外ゆゑ
説又云柏交ハ俗ゆゑ柏の間ゆゑ
〻〻ゆゑ

一
へツクり 貫丹集臭文云雷ハ名
とゆゑ人ハ露の上毛し心ゆゑんやゆゑ
ゆゑ雅陵江の芦間とゆゑ〻〻ゆゑ 或人

世ニ[illegible]ハ[illegible]ラ[illegible]ハ[illegible]ラ[illegible]ハ[illegible]ラ

故訓有テ音ナシ支那ニハ鱈ナキ故文字モナキ也朝政ニハ
此魚アリ大口魚ト名付ク又一名呉魚ト云朝鮮ノ著シ名ル
東醫寶鑑ト云書ニ見エタリ〻メフト云字ハ字書ニモ本
草類ニモ支那ノ書ニテハ漢名モ正字モナキ也我国ニテ
ハ鱈ノ字ヲ用ヘシ然ルニ鱈ノ字ヲ不用シテ朝鮮ノ大口魚
呉魚ノ字ヲ用ル人アリ何ソ吾国ノ字ヲ捨テ隣ノ国ノ字
ヲ用ルヤ朝鮮ハ支那ニ近キ国ナル故用之然江戸日本
橋ノ儒者カ居ヲ品川ヘ移シテ支那ヘ一里近クナリ
タルト悦ヒシト云類ノ業ハ鱈ノ字ヲ用ルヲ好ニサル也
如此ノ人ハ唐人ノ屎ヲモ箱ニ納テ寶物トスルナルヘシ

一 雷 論語鄉黨ノ篇ニ曰迅雷風烈必變朱喜註曰
所以敬天之怒。身丈日朱子ハ天ノ心ヲ能知テ云シ

欲推量故知ラズ天七人ノ如ク怒アラハ愁モアルヘシ樂モ悲
モアルヘシ晴天ハ樂ヲ降カシ雨ハ愁ノ時カ雨フルハ悲ノ
時カ雪霜ハ目クリカ鼻クリカ雹霰ハ身ノ垢カ予理ノ
究メス蒙昧ナル故是等ノ事明ノ知ラス

一 鳴弦蟇目 奥義 鳴弦ハ上古ヨリアル事ニテ弓ノ弦ヲ
スルヲ也中古ヨリ蟇目ノ矢ヲ放テ妖怪ナトヲ退ル事アル
ヲ白河院御トノヽモリ給テ後物ニオソワレサセ玉フ事
アリケルニ然ルヘキ武士ヲアロヘシトテ義家朝臣ニ仰アア
リケレハ黒又ノ檀弓ヲ一張ニイラセタリケルヲ御枕ノ上ニ置
セ玉ヒシカハ御悩忽平愈シ給シト古事談宇治拾遺記
セリ義家ハ鳴弦モセス蟇目モ射ス唯持タリシ棒
ケテ御枕上ニ置セラレシハカリニテ妖怪ニオクハシ玉フ

一ハ止ミタリ是義家ノ武徳ノ盛ナルヿハ天子ノ貴キ
御位モ及ハセ玉ハサリシ也是ヲ以考ヘ見ルニ鳴弦蟇目
ニ武徳ノ備ヘタル人ノ行フニ非レハ其験アルヘカラサルヿヲ悟
ルヘシ鳴弦蟇ノ作法流々様々有テ互ニ彼ヲ非トシ是ヲ
是トシテ相挑ニ其作法ニハ依ルヘカラス武徳有テ正シクタ
ルトナレ富気ヲ以邪気ノ押ヲ敬邪気退リヘシ武徳セナキ
人ノ行フハ験モナシ聖ヲ招クヘシ武士タル者聖ヲ得テ生キテ
ハ居ラルヘカラスサレハ武士ハ平日ノ行義ヲ正シクシテ身ニ武
徳ヲ備ヘヘキ事也行儀正シカラズシテハ身ニ武徳ハ備ラ
ル也此武徳ハ文徳ヨリ出来ル也武徳ハ鳴弦蟇目ノ奥儀
也彼ノ作法ノ是非ヲ論シテ作法ヨリ験ヲ得テトヲル
ハ浮気ナリ作法ニ拘ル事勿シ作法ハナクテモ也（本ニ）近年神

主山伏ノ類ヒ蟇目鳴弦ノ祈禱シ号シテ是ヲ行者アリ彼等
如キ何ノ武徳アランヤ又浪人ナト是ヲ以渡世ヲスル有リ妖術
ヲ行ヒ狐ヲ使ヒ人ニ狐ヲ付ケテアトヲ廻リテ蟇目鳴弦ニテ狐
ヲ離シテ金銀ヲ掠メ取ル奴モアリ是等ノ輩ハ矢ヲ穢ス大
賊也彼等カフルヿヲ信用スル事勿シ唯奥儀武徳ニ在ル也

一都乎刈之太刀　古事記ニ見エタリ出口延佳カ頭書ニ都
乎刈末詳トアリ○貞文云都乎刈ツカリトヨムヘシ延佳訓点ヲカリケス
カリヲ約ムシハキトナル也アリノ切ニ章ヲ切ル然シハツカリハツニキヘツ
ニキシツルキ所之也

一八坂瓊八咫鏡　朝廷ノ神器ノ外ニ又別ニ此二物ノ名
日本紀ニ見エタリ垂仁天皇八十七年ノ紀ニ曰昔毋波國
桑田村ニ有人名曰甕襲則甕襲ノ家有大石曰足

往是大咋山獸名牟士郡而殺之則獸腋有八尺瓊勾玉
因以獻之是玉今有石上神宮○景行天皇紀曰爰有女人
曰神夏磯媛其徒衆甚多一國之魁帥也聆天皇之使
者至則扱磯津山賢木以上枝枝八握劔中枝枝八尺瓊亦
素幡樹于船舳參向○仲哀天皇紀曰八年春正月己卯
朔辛巳于筑紫時岡縣主祖熊鰐聞天皇車駕扱
取百枝賢木以立九尋殿之舳而上枝掛白銅鏡中枝掛
十握劔下枝八尺瓊參迎于周芳田沙磨之浦○同紀曰
筑紫伊覩縣主祖五十迹手聞天皇之行扱取五百枝賢木
立于船之舳艫上枝掛八尺瓊中枝掛白銅鏡下枝掛十
握劔參迎于穴門引嶋而獻之因以奏言臣敢所以獻是
物者天皇如八尺瓊之勾以曲物御宇且如白銅鏡以分

明看山川海原乃提十握劔乎天下矣○雄略天皇九
年五月ノ紀曰小鹿火宿禰從称小弓宿禰喪來時ニ獨
留角國使倭子連奉八咫鏡於大伴ノ大連而所請曰
云云右ノ八咫鏡八尺瓊ハ神器ノ物ニハ非ス○又梅賢木
ニ鏡劔玉皆手ノ掛テ獻ルル事是上古王師ヲ迎ル礼物見
エタリ大古ノ風俗也

一大猫ニ名ヲ付ル右ニ引ル処ノ日本紀ニ飛鼠ノ家ニ有ル是
往トアリ清少納言ノ枕草子ニ猫ノ命婦ノ御モト名付ケタル
翁丸ト名付ケテ見ヘタリ馬鷹ナトニ名ヲ付ケテ其例多生
物外ニ天太刀鎧男等ニモ名ヲ付ルアリ又草木等
ニモ名ヲ付ルアリ

一療痘　疱瘡ハ食傷或ハ風邪感冒等ノ類ニ乘シテ發

起スル者也勢強テレハ發シ盡勢弱ケレハ發不盡シテ内
攻スル也痘皮裏ニ在テ發起セス或ハ發シテ後痘根紅色変
シテ白クナリ痘頂黒陷ス是皆勢弱ク發勢緩ナル者ナリ
温剤ヲ以發勢ヲ助テ痘毒ヲ發表セシムヘシ此等ノ症ハ或
腎帯或ハ紫荷車或ハ人ノ爪或柳ノ蟲等ヲ煎シ服サシムヘシ
或酒ヲ呑ムヘシ皆妙効也是經驗スル処也近年庸醫一角
ウシロヒル俗ニ云ウシロヒル ヲ用ルヿヲ好ムハ誤リ也一角毒ヲ解スル神藥也
食毒ニハ寄人痘毒ニハ邪ヲ恩シ凡解毒ノ藥性皆寒涼
ナラサルハナシ一角モ性寒涼ナレ一角ヲ服セシムルニ
依テ勢勢醒テ弥發起スル勢脱シテ終ニ死ス也緊シ
發表スヘシ右ノ如クナル症ニ調合ノ茶ハ見綴シ右ニ記ス処ノ
腎帯以下ノ物ヲ煎シテ多ク呑ムヘシ酒ヲモ呑シムヘシ又彼

品々ヲ一ツニ合セ煎シ用ルモ茶勢強カルヘシ酒ハ痘ノ良薬之
食和性寒ナルヲ忌ヘシ既ニ痘發起シ尽サハ右ノ茶ヲハ止ムヘシ酒モ止シ
嘗テ聞ク或貧家ノ小兒痘發シタレ起張セスシテ死
又貧ナレハ棺作ルヿモナラス酒樽ヲ求ノテ死體ヲ入夜
ニ葬セシト欲スル者ノ此小兒稀生シテ樽中ヨリ母ヲ呼ヒタリト
是酒気ニ感サレテ痘發張シタルナリ

一

胡床床机　胡床ト床机トハ一物ニアラス別物之貝原好古カ
和事始ニ胡床俗ニ云床机ト記シ新井氏カ軍器考ニ床几ト云
物ハ古ノ胡床ヘト記シタルハ誤ナリ胡床ハ今モ猿楽ノ鼓ヲ等
カ腰カケル物也是ヲ俗ニ床机ト称スルハ誤リ也床机又床机
氏書ク又床子氏云胡床ノ名日本紀神代巻ニ見ヘタリ云シ氏
唯腰カケタルヿヲ云ヒシ後代ノ胡床ノ字ヲ備リ用セシ

十九ハシ又禁廷ニ公事行ハルヽ片官人臨カノルニ胡床モ床子
一名床机モ西品尼用ラルヽ内裏儀式ニ床机床子ト記シ代モ有モ胡床モ見
ヘタリ今モ西品用ラルヽ也

一内侍所神鏡焼損　百練抄巻四云ニ六十八代後朱雀院
長久元年九月九日皇居上東門院　負文云云長暦三年六月廿七日内裏焼亡天皇
御朝所焼亡王上先御活成寺東金堂廊内侍所ノ神鏡在
灰燼中ニ焼損神鏡在ニ灰燼中ニ遺藏人頭左中将資
房左少将經秀等令ニ求之ニ僅奉ニ唯奉得ニ御鏡
焼損五六寸許御奉畧入ニ折櫃ニ人得ニ一切ニ三寸許具鏡焼損不分
明云云次得ニ三寸許各段々也又如金玉之物数
粒得之隨又奉加入ニ彼櫃也十日内侍所女官二人
夢想云一人夢云彼本所有小蛇頭有ニ悩氣之人
夢云彼本所有人云吾神離獨身在此處云云
仍女官等向ニ彼所奉鑒求之処ニ如金玉之物求得
二粒帰奉入畢有ニ霊験可感歎云云已上資房卿
記見ニ○負文云天照大神ノ授タマヒシ鏡ハ今勢ノ
神鏡也長久元年焼亡シ鏡ハ第十代崇神天皇ノ時
神代ノ鏡ヲ模シ作シ鏡也又天照大神ノ授タマヒシ天
叢雲ノ劔ハ今尾張国熱田ノ神鏡也安徳天皇ノ時
西海ニ沉ミ失セシ宝劔ハ是モ崇神天皇ノ時神
代ノ劔ヲ模シ作シ劔也天子ノ御寶ハカノ模シ
物ニテアリシカ鏡ハ長久元年ニ焼亡シ劔ハ西海ニ沉ミ失
タリ今内侍所ト云ハ長久元年ニ焼亡タル鏡ノ闕ケ眉多
ヲ集メ網タル也

一雙六采入皇百練抄ニ云長保一條院五年八月二日雙六采入
第二内親王皇内ノ僧慶圓加持之出之給度者
○貞丈按第二内親王ハ二條院第二ノ皇女媛子内親王
也長保二年十二月十五日降誕長保五年ニハ齢四歳也雙
六ノ采成長ノ人ノ皇ノ穴ニモ入ヘカラズ況ヤ四歳ノ皇女ノ
皇ノ穴ニ入ヘカラズ前陰ノ中ヘ入メルヲ女房隠秘シテ
皇ノ中ニ入メルトニヲメルナルヘシ加持ノ驗ハメルヘカラス女房
ホリ出シメルナルヘシ

一裾寸法 百練抄ニ堀河院寛喜二年四月晦若宮御
百日也今日出仕公卿裾寸法事内々爲頭中宮亮資賴
朝臣奉行被仰下大臣八尺大納言七尺中納言六尺参議
三位五尺四位上下四尺云云

一礼服御冠 百練抄ニ後嵯峨院仁治三年三月谷庚寅礼
服御覽天子御冠破損無其形仍可被新調云云

一戴餅 百練抄ニ後嵯峨院寛元三年正月一日今日春宮
御戴餅也大夫公相卿奉抱之傳持之御所近々之間
無御劔ノ役人云云戴餅ノ紫式部日記ニ事談抄草案集
ホロ書ニ見タリ小兒ノ祝事ナリ

一移風易俗 貞丈ニ云移風易俗ト云ハ聖人教ヲ施シテ悪シキ
風俗ヲ善キ風俗ニ移シ易ルヿヲ也聖人ノ教ハ時代風俗ニ
隨テ悪キ風俗ヲハ移シ易ヘ悪カラヌ風俗ニハ及サヲ也然ルニ今ノ儒者
ハ吾国ノ賤シキ風俗ヲモト思ヒ今日ノ世俗ノ人事ヲ何事モ鄙俗ニシテ
万事唐人風ニ改ムヿヲ好ム聖人ノ道ノ知ラザル者也聖人ノ道其国
ノ風俗ニ乖ラ唐人ノ風俗ニナレトニ教ヘアラズ孔子今日本ニ渡リ
玉ハヽ月代剃ラ麻上下ニカ服掛サセテ孔左衛門ナトヽ名付ケラルヘシ

一義貫諡字オクリナトヨム説又ハ諡ニ作レル誤ノ
也オクリナノ字ハ音ニモ也韻會小補ニハ本韻ニ常利切ニ音シ
又伊志切ニ倍又ニ陌韻ニ伊昔切ニ音ニ集韻笑白ハ見エタリ
ヱキノ音ニヨノバ笑フ白也オクリナニハナラズ諡号ノ上ニ号ト云ハ
誤也ヱキノ音ハ諡ノ諡ニ作リ云リ益ノ聲ニ諧テヱキノ
音トスルナレヘシ後代ノ音ナラン

一不遑毛舉　先年予カ友山岡俊明問曰庭訓往来不
遑毛舉ト云文アリ此毛舉西土ノ書ニモ及見如何予答
曰蓋我国ノ俗語故ト而已餘年心ニ忘レ了ナカリシ今日史
記評林ノ讀史總評ノ讀テ孔慮ニモ舉ノ字ノ見得
タリ總評ニ王維禎曰遷史之文或出本以之末或採末以
續顛或繫條而約言或一條數事或從中變或自肩

王維禎明朝人字元寧号弇州人

入意到筆隨思餘語止若紀類不可毛舉竟不得其
要領ト見エタリ然シハ我国ノ俗語ニハ非ス尚是ヨリモ古キ
書ニ有ヘケレ氏管見ナレハ知ラズモ舉ト云ハ筆ノ毛之筆ニカキ尽サレスト云フ事ナリ不能盡毫ナリ
云ヒ毫ハ筆ノ毛ノ事ニテアリ
舉ト云フ語余リ多クハ聞ナレスヤフニ思フ予カ管見ノ故ナレハシ

一柳箱　柳木ノ細ノ三角ニ削テ紙捻ニテ編テ皆ニ作レル冠
皆ナトノ載ル具盆之又別ニ一種アリ延喜式内匠寮式ニ
年料柳箱一百六十八合戸尺以下　料柳一百三連山城国進之
織管料生絲一十二斤中料調布一丈浸柳料高布一段
トアリ織ノ字ニ付テ考ルニ是ハ前ニ云ヒシ三角ノ木ノ編テ作レルハ
別ノ是ハ蒲柳ノ細枝ノ以生絲（蚕ノ糸練ルヲ云）ニテ織テ作レルヘシ
編ムノ織トハ云ヒシキ也中料トアル具蒲柳ノ洗テ拭ヒ中
也浸柳料トハ皆ニ作ル二ハ折ノ曲ル之ヘシメリシカケウルホニテ

折ル上ハ水ヲ浸ス命之此柳筥ハ今世俗間ニ用ル柳コリノ事
ナルベシ 三角二削ルハヤナイバコト云蒲柳ニテ作ルヤナキハコトヲカイアハセニテス

一女拜礼　延喜中務省式世官季禄之條ニ云宣旨輔還
退ノ賜官時版宣命示准之女官降座再拜注云用扱地拜謂著四手
於地首不至手地他皆叙之訖各復座

一戸籍　同式云凡京職及諸国所進戸籍皆人ニ染黄
蘗但太宰管内諸国ハ不在此限若有未進有移送民部省拘留調庸
税帳返抜

一宣命紙色　同内記式云凡宣命文者皆以黄紙書之但
奉伊勢太神宮文以縹紙書賀茂社以紅紙書

一位記　同内記式云凡裳束位記式神位記三位以上縹紙
緑縹雑綺帯黄楊軸親王位記者白紙表白呉綾裏
紫羅縹緑綾裏雑綺帯赤木軸三位以上者縹紙緑
縹雑綺帯黄楊軸五位以上者白紙白縹白帯女官同但僧都以上准三位律師准五位又曰納位記料草宮八合緑絹八尺結宮帯料並隨損
付内侍奏受内蔵寮頭又按此草宮三位記ノ入テ宮ニ下スハニアラズ足ハ位記ノ巻物ヲ作ル内記ノ方ニ納ノ事ノ
ベシ凡納贈位記料柳筥臨時受内蔵寮

一書封字　同内記式云凡賜渤海国勅書函臘上書封
字ノ函上頭書中務省三字ノ頭文曰臘トハ糊ヲ用ヒスシテ臘ニテ
臘ノ二封字ヲ書ノ丁正古ヨリアリシナリ唐正ノ書皆間モ臘ニテ付ル
紙ノ二封字ヲ書ノ丁正古ヨリアリシナリ

一短冊　同主鈴式云飛弾儲料器檜函八合短冊十枚

一桜案　桜人子案公木尺二カンガリルトヨム字彙云桜ハ
考也正韻彙篇云案ノ考ノ験也

一皮革韋　皮ナメシカハ　韋ナメシカハ　韻會小補皮ノ字ノ注

生皮理之曰葦生ハ剥取クルニノ毛皮也
理トハ毛ノ去リテ滑ニスルヲ云葦也葦ノ面ノ削クヒリテ柔
ニシクルヲ葦トヒカ今世俗ニ浸ニ皮革ノ字ヲ混シ用テ葦ノ
字ヲ用ルヿナシ

一小忌青揩　延喜縫殿式ニ云新嘗祭小齋諸司青揩
布形三百十二領　細布一百卅領佐渡布一百　絁紐料四丈貲布
六端一丈二尺　別長二尺ニ八十二領並別ニ又一尺　山藍五十四圍　牟模飯料米二
斗四升八勺ト見ヘタリ青揩ハ白布ニ山藍ノ葉ヲ以青
ク模様ヲ揩付ルモノ山藍ハ常ノ藍ニハアラス透骨草也
模ト云ハ模様ヲ板ニ彫リクタル木形也模飯ト云ハ飯ヲ糊
ク糊ニシテ布切レニ包テ模ノ面ヲ歩テ模ニ糊ヲ付真
上ニ白布ヲ被テ布ヲ押付レハ文様ハ高ク其外ハ低リ
ナルヲ山藍ヲモテ布切レニ包テ揩ルナリ糊ヲ付ルヿハ
揩ル片布ヲ動カセヌヤウニシテ為ナリ

一釋奠三牲　延喜大學寮式ニ云三牲大鹿小鹿豕各加五藏　兎醢料又云
凡享ノ日在國釋神并春日大原野等祭之前及與
祭ノ日相當テ停用ニ三牲及兎代之以魚其魚ハ毎
府令ノ進五寸以上鯉鮒
六衛府三牲ノ進スルヿ而文三アリ三牲代ニ府ヨリ魚ノ進スルナリ
鮒之類五十隻鮮鯉者一ト毎府ハ

一肇子　同内匠寮式云肇子一口徑七〇　儀注云
盛御膳盤謂之肇子ト霞ニ膳上ノ謂之肇子ト